

# 「大日本古写経」の料紙について —茶毘紙、埴料、漉き返し紙を中心に—

高橋 裕次

## はじめに

今回、考察の対象としたのは特種東海製紙株式会社が所蔵し、大倉集古館に寄託されている「大日本古写経」である(以下「本古写経」と称す)。収録された古写経は3～10行程程度の奈良朝写経の断簡が中心で、奈良時代の「行信願経」や平安～南北朝時代の『大般若経』など一紙分の断簡が約30件、高山寺旧蔵の中世の紙背文書がある二紙統の断簡6件などを含む、奈良から江戸時代にいたる計250件よりなっている。各断簡は、「奈良朝時代／不知題経之断簡」のように、推定した時代と、経名あるいは通称などを書いた小札を添えて台紙に貼り、さらに木枠を付けたものをほぼ時代順に整理して、計6箱の榎倉箱に収めている。「本古写経」の整理を行い、年代、経名などの検討を行った人物やその背景については明らかでないが、小札の内容等から、古写経の筆跡や時代判定に関する一定の見識が反映されたものであると理解される。

調査では、250件の経巻について、まずデジタル一眼レフカメラでの撮影を行い、料紙の形状や色、料紙装飾、書式(訓点など)、文字の色、筆跡、書風などの情報を記録した。経名は「大蔵経データベース」(<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)を参照して特定し、書風、紙質、寸法などからおおよその時代を判断した。料紙の色については、茶系統のものは厳密には黄蘗、椴などを区別すべきであるが、汚れや経年などで茶色に変色している場合が多いため、一つの目安として「黄蘗染」と表現した。

次に顕微鏡を用いて、料紙の繊維の状態(幅、先端部や中央部の形状、細胞壁の厚さ、繊維の方向性)、さらに添加物である埴料の有無などを観察した。使用した顕微鏡は、デジタルマイクロスコープDino-Lite Edge 型番：DINOAM7515MT8A。約700～900倍の高倍率モデルで、AMR(自動倍率読み取り)機能により、画中に倍率およびそれに応じてスケールが掲示される。後日、測定した繊維の幅を確認するために0.010mm、0.020mm、0.030mm(30μm)のスケールを画像上に配置した。但し、本報告では画像が縮小されていることをご承いただきたい。

「本古写経」は、その形状により調査をする上でいくつかの制約がある。それは二紙統の断簡以外は、1件ずつ台紙に貼っているため、料紙の裏の様子が不明で、裏面の繊維の流れ、透過光による糸目や質目の状態、板目や紗目の有無や、厚みの確認ができない点である。

顕微鏡画像は、1件について4～10枚、なかには30枚以上に及んだ料紙もある。料紙中でも場所によって繊維の見え方、埴料の有無などが全く異なり、しかも料紙を顕微鏡によって観察・撮影できる範囲は100倍で約1mm、高倍率では更に範囲が限られてくる。したがって、必ずしも均一とはいえない料紙の繊維や埴料などの状態を、できる限り客観的に把握しようとする場合には、広範囲にわたって観察する必要がある。

調査は非破壊が原則で、料紙の繊維を現状のままの状態を観察することを主眼とした。サンプリングした繊維を、プレパラート上

の染色液による呈色反応で識別する方法に比べれば精度は落ちるが、顕微鏡で隅々まで観察・撮影することで、その料紙の性質を少しでも解明することを目指している(注1)。

なお、料紙の顕微鏡による観察について付言すると、近年は高額な機器を用いなくとも、コンパクトで高機能な顕微鏡が比較的価格で入手できる。たとえば100～200倍程度の偏光顕微鏡を用いると、料紙の繊維の幅や膜の厚さの違いなどを確認できる。これのみで繊維の同定を行うのは難しいが、刊行されている手漉き紙関係文献の標本紙を顕微鏡で撮影した画像などと比較することで、楮や雁皮・三椏などの区別や埴料の有無についてある程度の判断が可能である。

以下、本稿では、「本古写経」に収められた經典の料紙のなかで、特徴的なものをとりあげる。その構成は、1.白麻紙、楮紙、2.光明皇后願経、3.称讃浄土仏摂受経、4.マコム紙(茶毘紙)、5.二月堂焼経、6.行信願経、7.隅寺心経、8.平安～南北朝時代の大般若経、9.漉き返し紙、10.料紙の再利用、以上の10項目とし、とくに茶毘紙、埴料、漉き返し紙を中心に考察を加える。そして、それぞれの料紙の材質、繊維の状態、加工の有無、について報告する。その記載事項は、①箱番号(A～H)と登録番号、②「小札」に記載された時代・名称など、③「大蔵経データベース」により特定した名称、經典訳者、④着色がある場合の料紙の色、⑤繊維の種類、⑥埴料の有無、⑦界線の有無、⑧その他、⑨繊維画像の倍率とした。無い項目は記載していない。

なお、「本古写経」の全体像を明らかにするために、本文末に添付したリストには、上記の記載事項①～⑨に加えて、断簡に収録されている經典の本文を黒字で載せ、その前後の数文字を赤字で示した。但し、長文に及ぶものは途中で(以下、略)とした。また、文中で取り上げた經典に●を付した。

[注1]：大川昭典氏は「文書紙の繊維組成及び埴料の観察」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017年)において、非破壊による文書料紙の調査の参考となるよう、料紙に使用されている楮・三椏・雁皮の三大繊維と竹繊維についての顕微鏡観察による識別法、またその繊維に配合されている埴料の識別法などについて、詳しい解説を行っている。これから料紙の研究を行おうとする者にとって大いに参考になるであろう。

## 〔1.白麻紙、楮紙〕

**A1-13「奈良朝時代 不知題経之断簡 白麻糸墨聖武天皇大和切」**  
**大方廣佛華嚴経卷第二十一(佛跋陀羅)**

楮紙打紙、埴料わずか、墨界、繊維画像723倍。

「本古写経」のなかで、小札に白麻紙とあるものは、A1-12と本

経のみである。麻紙には、大麻と苧麻があり、大麻の繊維は幅15～46μm程度(1μmは0.001mm)、長さ6.5～37.2mm、苧麻の繊維は幅40～90μm、長さ130～250mmと長いので、紙漉きをするには繊維を短く切断している場合が多い[注2]。この料紙の繊維の幅はおおよそ10～30μm、長さは計測していないが、薄膜のときれときれの状態などからみて、麻ではなく、楮の繊維であり、打紙がされている。

繊維上やその間には埴料の小さな粒子がみえる。埴料は一般に紙の透明度を抑えて白さを増し、平滑にするために加えられるもので、この料紙ではほんのわずか確認できる。かつては、奈良朝写経で色が白く上質な料紙は、「白麻紙、聖武天皇筆」との極めが行われ、そのことが「本古写経」からも知られるが、繊維を調べると本料紙のように楮紙であることが少なくない。

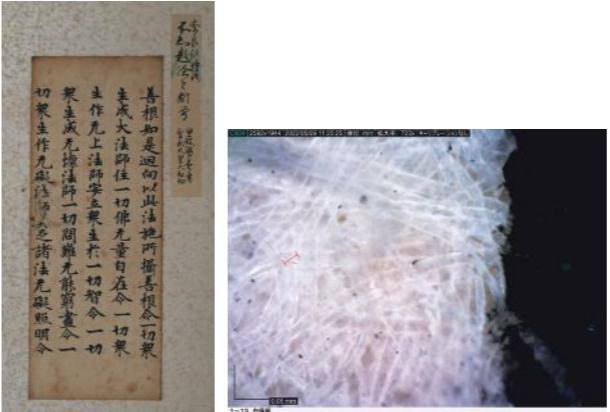


図1

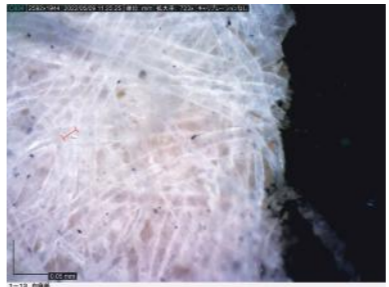


図2

[注2]：大川昭典「古写経料紙の繊維」(増田勝彦編著『和紙の研究(増刷版)－歴史・製法・用具・文化財修復－』財団法人ポーラ美術振興財団(POLA ART FOUNDATION)助成事業「文化財修復用紙としての土佐典具帖紙等の特性調査研究」研究報告書、2004年(初版は2003年))に抜粋された原料繊維形態(研究所時報別冊、非木材パルプ特集、印刷局研究所、1976年8月)による。

## A1-17「奈良朝時代 灌頂経之断簡」

**佛説灌頂随願往生十方淨土經卷第十一(帛戸梨蜜多羅)**  
黄蘗染、楮紙打紙、埴料わずか、非繊維細胞、墨界、繊維画像814.5倍。

繊維画像のうち、図4は埴料が左端中央から右斜め上方向にみえるが、図5では右上に埴料がわずかに入っているものの、左下は繊維の奥にあるためピントがあわず確認できない。今回の調査はなるべく多くの箇所を観察することにしたが、埴料を重点的に調査する場合には、こうした事例をふまえて、複数箇所を観察・撮影する必要がある。

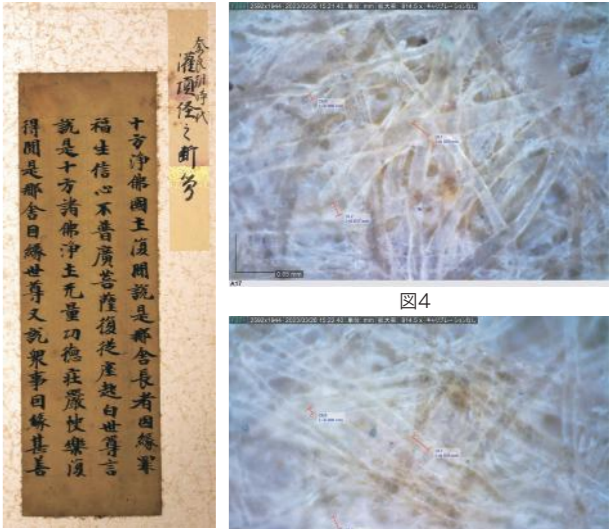


図3

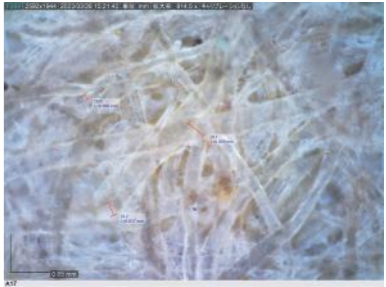


図4

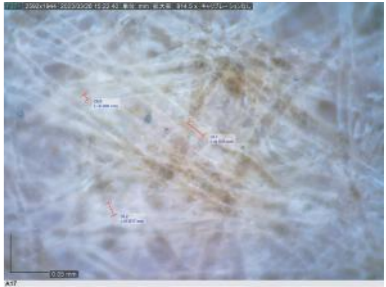


図5

## 〔2.光明皇后願経〕

光明皇后が発願し、写経させた一切経は、天平12年(740)の「五月一日経」、天平15年(743)の「五月十一日経」、天平宝字4年(760)正月11日の「坤宮官一切経」が知られる。なかでも「五月一日経」は伝存する経巻の数が多く、天平写経の代表作として「光明皇后願経」とも呼ばれている。

## D4-27「奈良時代 光明皇后願経之断簡」

**楞伽阿跋多羅寶經卷第四(求那跋陀羅)**

黄蘗染、麻と雁皮の混抄、打紙、埴料わずか、墨界、繊維画像706倍。

この經典は、やや扁平で謹厳な筆跡の文字で書かれており、「五月一日経」の遺品であることが分かる。麻と雁皮の混抄は、光明皇后が関わった經典に多くみられる。長さが3～5mmの雁皮に含まれるヘミセルロースは、粘性があつて沈殿しにくく、紙漉きをし易くする特徴があり、麻に混抄することが行われた。こうした技術革新は、朝廷の紙漉き所である「紙屋院」によって実施された。

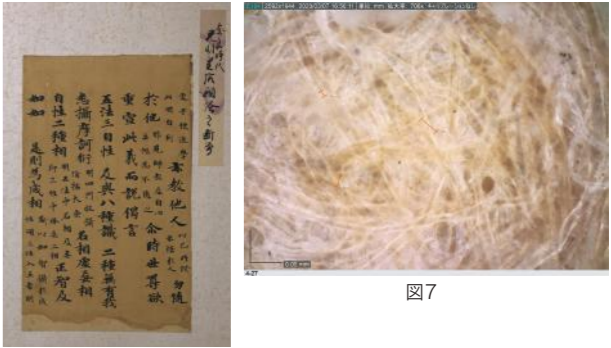


図6



図7

H8-7「奈良朝時代 光明皇后願経之断簡」

雑阿毘曇心論卷第二(僧伽跋摩等)

黄蘗染、楮打紙、填料あり、非繊維細胞、墨界、繊維画像 706 倍。  
麻は苧麻の場合でも繊維の長さは 130 ~ 250 mmあり、繊維の処理だけでも大きな手間がかかるので、漉く前に繊維を短く切断している。抄紙後も表面がごわごわしており、文字を書くには表面を猪牙など硬いもので磨き平滑にする必要がある。そのため雁皮の混抄も行われたが、やがて、長さが6 ~ 21 mmで扱いやすい楮の繊維を中心に用いるようになった。この料紙は「光明皇后願経」の中で、楮を料紙に用いた例であり、打紙が施されている。

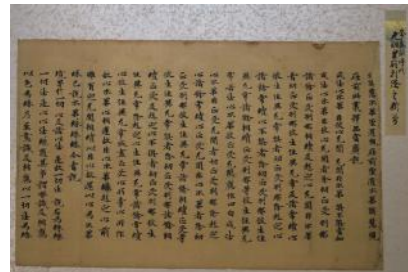


図8

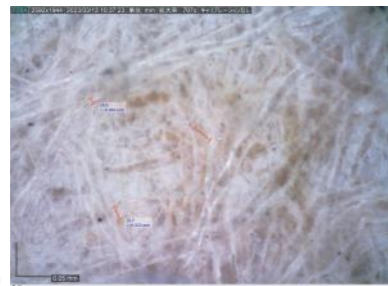


図9

H8-6「奈良朝時代 光明皇后願経之標紙」

根本説一切有部毘奈耶雜事卷第十九

黄蘗染、楮紙、填料多い、非繊維細胞、繊維画像 784 倍。  
表紙のみ。奈良時代の表紙の特徴である紗漉き(短く切断した繊維を漉くために箕の上に紗を敷いて紙を漉く)の痕跡は確認できない。外題はその筆跡から奈良時代よりも時代の下がる書き入れとみられる。しかし、八双部分にある紐の痕跡からは原表紙と考えられる。



図10

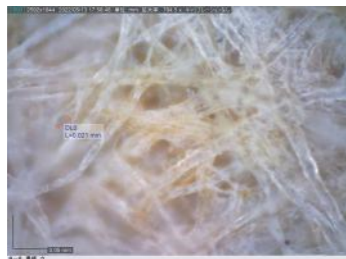


図11

〔3. 称讃浄土仏撰受経〕

奈良時代の『称讃浄土仏撰受経』といえば、天平宝字 4 年(760)の大量書写が特記される。同年 6 月 7 日に光明皇太后が崩御する

と、皇太后が写経所に完成を急がせていた「坤宮官一切経」の書写事業は打ち切れ、代わりに七七齋(四十九日)用の經典として『称讃浄土仏撰受経』1,800 巻の書写が造東大寺司写経所で行われた。この書写は 18,000 枚の料紙を必要とする大事業であり、約 1 か月後の 7 月 11 日までに書写を終える予定で進行し、経軸の作業を経て、四十九日直前の 26 日には完成した。あわせて、諸国の僧尼に『称讃浄土仏撰受経』を書写供養させており、その総数は膨大なものになった。この写経事業について、宮崎健司氏は、藤原仲麻呂による極めて政治的意味をもつものと推定し、さらに書写經典の選択の背景にも仲麻呂の仏教政策のブレインと思われる慈訓の関与が見受けられるとしている〔注 3〕。

〔注 3〕：宮崎健司「光明子七七日写経をめぐる一、二の問題」(『大谷学報』75 巻第 4 号、2016 年)

H8-1「奈良朝時代 稱讃浄土佛撰受経之断簡」

称讃浄土仏撰受経(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界あり、繊維画像 707 倍。

奈良時代の經典には、いかにも写経生の筆跡というものがみられる一方で、実に多様な筆跡が確認できる。光明皇太后七七齋用の『称讃浄土仏撰受経』では、筆跡の違いを中央で作られた写経と、諸国の僧尼に国分寺で書写供養させたものとの違いと考えることも可能であろう。この H8-1 の図 13 の筆跡からは、その謹厳端正でやや扁平な書体から、造東大寺司写経所で書写されたものと考えられる。今後、現存する奈良朝写経の紙質と筆跡の研究を進め、中央と諸国との写経の差異を明らかにすることで、仏教の広がりや、天皇と諸国寺院との関わりにおける写経事業の様相が見えてくるものと思われる。



図12

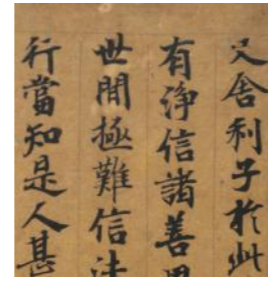


図13

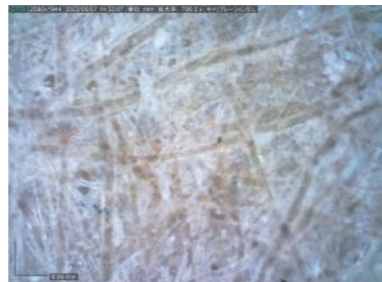


図14

D4-11「弘仁時代 不知題経之断簡」

称讃浄土仏撰受経(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非繊維細胞、墨界あり、繊維画像706倍。  
小札には弘仁時代(810 ~ 822)とあるが、前出の H8-1 同様、奈良時代の天平宝字 4 年(760)の光明皇太后の七七齋に関連して書写された『称讃浄土仏撰受経』であろう。図 16 の筆跡は H8-1 の図 13 と比べるとやや時代が下るかもみえる少し柔和な筆線であるが、図 17 の顕微鏡画像からも料紙の繊維の様相は奈良時代の他の写経と比較して大きく異なるものではない。おそらく諸国の僧尼によって書写されたもので、造東大寺司写経所とは別のルートで準備された料紙を用いていると考えられる。

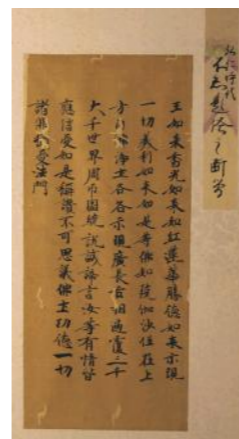


図15

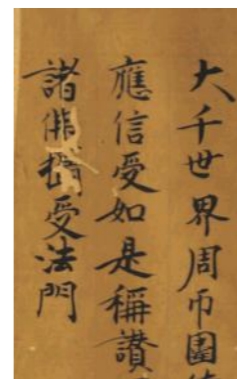


図16

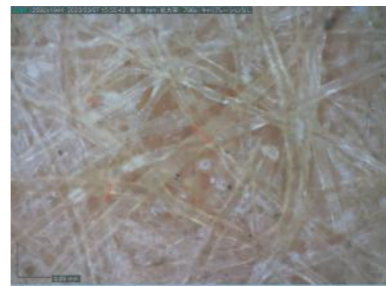


図17

ところで、東京国立博物館所蔵の『称讃浄土仏撰受経』(以下、東博本「称讃浄土経」と称す)は、光明皇太后七七齋に関連する『称讃浄土仏撰受経』とみられる H8-1 や D4-11 と異なり、マユミの繊維を用いだけでなく、表紙、本紙の前半、後半で混抄する繊維の種類を変える特別な料紙であることが明らかになっている〔注 4〕。光明皇太后の七七齋のための『称讃浄土仏撰受経』の書写事業は、造東大寺司写経所にて極めて限られた期間で実施され、おそらく料紙については同じ規格の料紙を使用することが前提で準備が行われたと考えられる。こうした光明皇太后七七齋のための書写事業と、特別なマユミ紙の東博本「称讃浄土経」とはいかなる関係にあったかについては、次の項で検討する。

〔注 4〕：『修復』第 6 号(「修理報告 2 称讃浄土仏撰受経 東京国立博物館蔵」岡墨光堂、2000 年 3 月)

〔4. マユミ紙(茶毘紙)〕

茶毘紙の遺品として最も知られているのは「大聖武」である。聖武天皇の宸翰とされる写経の断簡で、仏教的な立場から見た賢人と愚人の寓話 69 篇を集めた『賢愚経』を書写したものである。もとは東大寺の戒壇院に安置されていたと伝え、現在、東大寺には巻第 15 の 1 巻(国宝)が所蔵される。それ以外は江戸時代初期に寺外に流出したらしく、多くの断簡が、著名な筆跡のアルバムといえる古筆手鑑の巻頭を飾り、あるいは掛幅に仕立てられ、東大寺の所在地にちなんで「大和切」とも呼ばれて諸家に分蔵されている。

奈良朝写経の名品である「大聖武」は、重厚な大字で書写され、堂々とした王者の威厳を示していることから、その伝承筆者は聖武天皇とされてきた。さらに「大聖武」とその料紙である茶毘紙が強く結びついたため、茶毘紙に書写された写経であれば「大聖武」とは明らかに別筆であっても古筆家によって聖武天皇宸筆と極められ、文字の大きさによって「中聖武」「小聖武」と称された。

茶毘紙には、「白茶毘紙」「黄茶毘紙」の二つがある。いずれも伽羅、白檀などの香木の粉末を漉き込んだような料紙で、表面に黒や茶の粒子が点々としており、茶毘に付した灰を見るような感じがするというので、この名が付けられたのであろう。1995 年頃には、顕微鏡による分析試験で、茶毘紙はマユミ原料の塵入り紙であり、微粒子はマユミの靱皮の塵であるという説が出てきた〔注 5〕。次いで 1999 年、東京国立博物館が、「中聖武」に属する東博本「称讃浄土経」を修理するに際して、高知県立紙産業技術センターに繊維の分析を依頼したところ、その料紙は、マユミの繊維を用いたマユミ紙で、さらに楮、雁皮などの繊維を混抄しており、表紙はマユミと雁皮紙の混抄、本紙 1 ~ 5 紙はマユミと楮の混抄、本紙 6 ~ 8 紙はマユミのみで抄紙されていることが分かった。そして繊維に混入している顆粒子は、マユミの靱皮繊維に含まれる樹脂成分や樹皮中の細胞群や粗い繊維の混入物であることが明らかになった〔注 6〕。この分析から、「大聖武」「中聖武」「小聖武」が茶毘紙とよばれる理由の一つである粒々の正体については一応の決着をみたといえる。

ところで、「古筆名葉集」(文化元年版)は「大聖武」について「唐紙胡粉地経切」と記している。「唐紙」とあるのは、「大聖武」の料紙である茶毘紙が中国より渡来したものであると考えられていたことを示す。胡粉地とは、顕微鏡で「大聖武」の繊維の間などにみえる白い粉状のものを指していると思われ、おそらくは料紙を白くみせるために入れた填料であると考えられる。胡粉であるかは未確認である。また、本調査では「大聖武」に含まれるとされていた白い粒状のものが、「中聖武」「小聖武」にも含まれていることを確認することができ、「大聖武」だけでなく「中聖武」「小聖武」の製作における填料が大きく異なることが解明された。今後は、蛍光 X 線分析装置を用いて、これら填料の更なる実態解明を行うことが必要となる。

[注5]：久米康生『和紙文化辞典』216頁「だびし〔茶毘紙〕」の項（雄松堂出版、1995年）

[注6]：前掲注4 岡墨光堂報告書

**A1-14 「奈良朝時代 大和切 小字(茶毘帚小聖武)」**

**根本説一切有部毘奈耶雜事卷第三十四(義淨)**

マユミと楮の混抄、填料あり、墨界あり、繊維画像722.5倍。

填料として繊維の下に細かい白色の粒子がみられるが、その量はわずかである。図19は、マユミの靱皮繊維中の樹脂の粒で、最大のものは横幅が0.3mmある。「本古写経」には、「大聖武」が含まれないため、2020年に調査をした特種東海製紙所蔵「賢愚経断簡(大聖武)」11幅の調査結果と比較すると〔注7〕、ほぼ同じ大きさの樹脂が確認された。

また、図20には白皮の表面にある黄色の筋張った繊維と、樹皮に含まれる塵がみえる。本来は表皮を除去して白皮にする作業で取り除かれるものであるが、これらマユミ紙ではその多くが残っていることが分かる。この理由は、マユミ紙の復元を行った森香代子氏の研究で明らかになる。マユミは1年目の枝は緑色をしているが、成木になると幹にできる縦の裂け目に喰い込んだ部分の表皮の除去が困難で、かなり入念に除去したつもりでも、繊維化処置後に確認すると白い繊維の中に褐色のチリが多数残っているというのである。さらに後日、細枝の若く繊維の柔らかそうな部位のみで試作を行ったが、結果は趣の異なる青く透明感のあるものになったという〔注8〕。マユミを使った白い料紙を製作する上で、白皮の表面にある黄色の筋張った繊維は残らざるを得ないことが分かる。

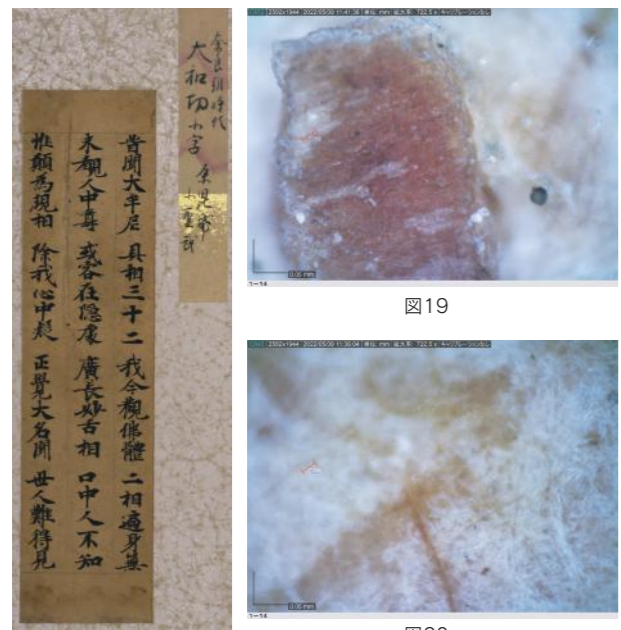


図18

[注7]：大倉集古館企画展「彩られた紙—料紙装飾の世界」(2021年4月6日～6月6日、高橋裕次担当)のため

の調査。調査の結果の一部は展覧会リーフレットに掲載している。(https://www.shukokan.org/Portals/0/images/exhibition/history/2021/20210406\_kami\_leaflet.pdf)

[注8]：森香代子「マユミ紙についての一私考」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017年)

**A1-15 「奈良時代 大和切中字(茶毘帚中聖武)」**

**根本説一切有部毘奈耶雜事卷第三十九(義淨)**

マユミと楮の混抄、填料わずか、墨界あり、繊維画像722.5倍。

本料紙はマユミがほとんどで、楮は少ない。図22は、マユミの樹脂の粒と白皮の表面の黄色い繊維、図23は、樹皮の一部や細胞、白皮の表面の黄色い繊維がみえる。前出A-14の「小聖武」と、このA1-15の「中聖武」の本紙に共通するこれら残留物の種類や料紙内での分布状況は「大聖武」とほぼ同様であった。



図21

図22

図23

さらに注目すべきは、A1-14の「小聖武」、A1-15の「中聖武」は『根本説一切有部毘奈耶雜事』という経巻の巻第三十四と巻第三十九であり、マユミと楮を混抄した茶毘紙を用いているという点である。『正倉院紀要』第32には、『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第十九(神護景雲経二五号) 正倉院聖語蔵]が、「茶毘紙風」と記載されている〔注9〕。この聖護蔵本は、神護景雲2年(768)に称徳天皇(764年孝謙天皇重祚)が父聖武天皇の冥福のため発願書写させた一切経中の一巻であり、これが茶毘紙であるとすれば、茶毘紙であるA1-14、A1-15も「神護景雲経」の僚巻である可能性が高くなる。

マユミ紙(真弓紙)は天平感宝元年(749)に「更利真弓紙十三帳」と正倉院文書に初見がある。そして天平宝字2年(758)に「真弓紙」とあるのを最後に記録から姿を消しており、天平時代の9年間だけに漉かれた紙と考えられている〔注10〕。

これらのマユミ紙は、正倉院文書の中で「檀紙」とも書かれている。仲洋子氏によれば、天平19年(747)には光明皇后に関する事務を司った皇后宮をさす「宮」から写経所に長檀紙(長いマユミ紙)1850枚が供給されている。「宮」から供給された紙は天平18年から20年の3年間に集中しており、写経所が皇后宮の所属であったときに多くの紙が供給されたことが分かる。そして斐紙、麻紙、檀紙、色紙という紙の種類から考えると、朝廷の紙漉き所である「紙屋院」で漉かれた紙であろうと指摘している〔注11〕。

また、森香代子氏は、写経所に檀紙(マユミ紙)が納入された時期や出所などから、マユミ紙が光明皇后の意思によって製作され用いられたという印象を強くするとし、先にD4-11の項で述べた東博本「称讃浄土経」の存在から、マユミ紙使用の意思は光明皇后亡き後にも、娘の孝謙天皇周辺に引き継がれたと思われる。『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第十九に繋がっていると述べている〔注12〕。

以上の森氏の見解は基本的に賛同できる。東博本「称讃浄土経」が光明皇后七七斎の供養に向けて実施された『称讃浄土仏撰受経』1800巻の写経の内の1巻であり、仲麻呂主導による写経事業の所産と考える森氏の説に対して、本論では更なる視点を提示したい。それは東博本「称讃浄土経」を、光明皇太后七七斎の1800巻には加えず、異なる時期に特別に写経所に命じて作らせた可能性である。森氏が光明皇后の意思によってマユミ紙が製作されたとする点に留意すると、東博本「称讃浄土経」の製作は、娘の孝謙天皇の時期より以前に光明皇后(皇太后)が関わったと考えることができ、光明皇后がどの程度関わっているか、あるいは関わっていないかを改めて検討すべきであろう。それは、マユミ紙を使用した「大聖武」が製作された背景や時期を解明することにもつながっていく。

マユミ紙(檀紙)の正倉院文書における初見は天平感宝元年(749)であるが、その年の7月2日に聖武天皇が譲位して孝謙天皇が即位し、7年後の天平勝宝8歳(756)には聖武上皇が崩御している。その間、天平勝宝4歳(752)には、紙屋院で漉かれた檀紙195枚が内蔵寮に納められ、そこから内裏を経て、写経所に供給されている。こうしたマユミ紙の使用状況は、まさに光明皇后にとって大きな節目の時期と重なっているのである。写経所を創始した光明皇后が、この白く細い透き通った繊維に独特な塵の混じった特別な料紙、つまりマユミ紙の存在を知ったのであれば、是非とも使用したいと考えたのではないだろうか。

これまでに知られているマユミ紙の写経遺品で、書写年代が明らかなのはみあたらない。東博本「称讃浄土経」が、表紙、本紙1～5紙、本紙6～8紙で繊維の種類と配合を変えて構成されていることに注目すると、この複雑な料紙の繊維の種類と配合は、マユミの繊維を手にした紙屋院が、光明皇后の指揮のもとで行われた写経事業に相応しい料紙を製作するために試みた結果ではないだろうか。さらにその料紙を供給された写経所では、それぞれの料紙の性質を比較するために、擦り切れ易い表紙には雁皮の混抄、中間は主たる繊維にな

りつつある楮との混抄、そして細く巻くことで折れが発生し易い軸付紙にマユミ紙を用いるという実験を行ったのであろう。おそらくその結果は、のちに作られる「大聖武」の料紙製作に反映されたものと考えられる。

[注9]：「正倉院宝物特別調査 紙(第2次)調査報告」(『正倉院紀要』第32、2010年)

[注10]：前掲注1 大川論文と同じ。

[注11]：仲洋子「写経用紙の入手経路について」(『史論』33号、1980年)

[注12]：前掲注8 森論文と同じ。

**A1-38 「奈良朝時代 不知題経之断簡 茶毘紙」**

**不空羼索神呪心経後序(玄奘)**

マユミと楮の混抄、填料多い、板目あり、朱点、墨界、繊維画像702倍。填料が多く、繊維の形状がわかりにくい。

「本古写経」の調査のなかで、茶毘紙に板目の存在が確認されたのは、本料紙のみである。板目とは紙漉きの工程の最後に、漉きあげた紙を干板に貼って乾燥させる際、干板の年輪の痕跡が紙に残ったもので、画像(図25)にみえる凹んだ横線である。

本料紙にはマユミの靱皮繊維に含まれる樹脂成分や、粗い繊維の混入物などの粒が散在している。古代の写経料紙は必ずといえるほど打紙加工を施しているが〔注13〕、打紙をしてもマユミ紙の粒はつぶれず、さらに板目が残る程度の打紙であることが、この料紙から明らかになる。



図24

図25

D4-28「小聖武 荼毘帛 下絵は後世のものなり」

佛説陀羅尼集經卷第九金剛部卷下（阿地瞿多）

黄蘗染、マユミと楮の混抄、填料あり、繊維画像 図29、図30:703.5倍。

料紙に後世の金銀下絵があり(図28)、金銀箔を撒く際、紙面に引かれた糊が繊維の様子をわかりにくくしている。「小聖武」と呼ばれる貴重な荼毘紙の経典にあえて金銀装飾を施す理由が明らかでない。おそらくは、本料紙が荼毘紙であることを知った上で、この「小聖武」を貴人に献上する際などに荘厳の目的で行われたものと考えられる。

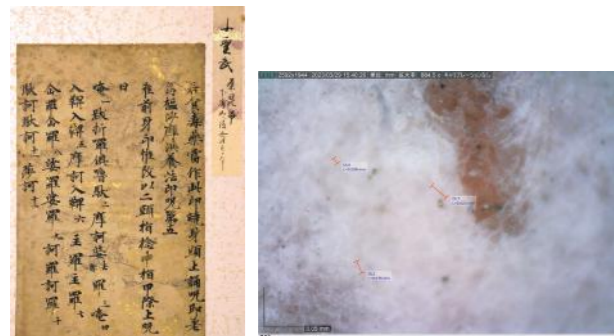


図27

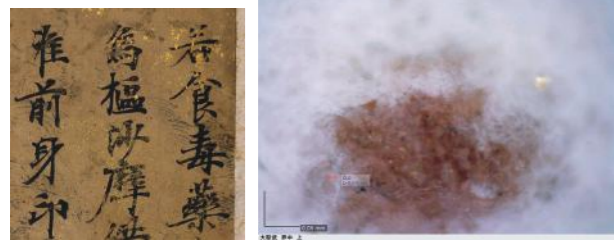


図28

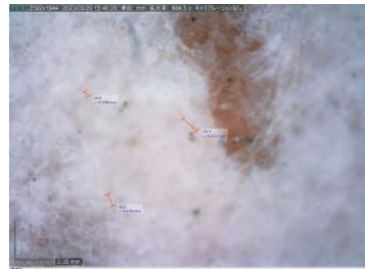


図29

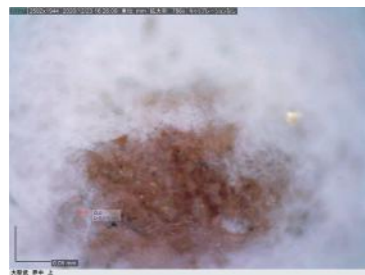


図30

また、このD4-28「小聖武」(図29)と、「賢愚経断簡(大聖武)」(図30)のマユミの樹脂の粒を比較すると、どちらも樹脂の粒の上にマユミの繊維と非常に細かい0.001mm(1μm)以下の白い粉状の物質が乗っているのがわかる。この白い粉状の物質は填料である。正確には蛍光X線分析装置で確認すれば、胡粉(炭酸カルシウムあるいは鉛白)または米粉であるかを判別できる。

本調査では、荼毘紙である「大聖武」「中聖武」「小聖武」の料紙を顕微鏡で観察し、マユミの樹脂の粒と白皮の表面の黄色い繊維、樹皮の塵や細胞などについて観察を行った。これら荼毘紙特有の混入物の種類やその分布状況は、「大聖武」と「中聖武」「小聖武」ではほぼ同様であり、それぞれによって異なることはない点についても、確認をすることができた。

(注 13)：前掲注 1 大川論文と同じ。

〔5. 二月堂焼経〕

寛文 7 年(1667) 2 月 14 日、東大寺修二会(お水取り)の期間中に二月堂が焼失した。この火事で二月堂に伝来した『華嚴経』(六

十巻本)の多くに焼損が生じたため、これらは「二月堂焼経」と呼ばれる。奈良時代中期のすぐれた写経生の手になる奈良時代唯一の紺紙銀字経である。

A1-24「奈良朝時代 二月堂之焼経切」

大方廣佛華嚴経卷第二十六(佛駄跋陀羅)

紺紙銀字、幅 15 ~ 25μの楮繊維、打紙、銀界、繊維画像 722.5 倍。

楮の繊維を切断して用いているが、料紙を平滑にするため、紙漉きを行う前の段階で、さらによく叩いていることから、繊維がフィブリル化(枝分かれ)しているのが「二月堂焼経」の特徴的な部分である(図32)。フィブリル化しているものは、本調査ではこの料紙のみであるので、他の料紙の繊維の状態と比較するとよくわかる。また、「二月堂焼経」の経文が銀字でありながら酸化せずに輝きを保っていることについて、プラチナとする説もある。その謎を解くには蛍光X線分析を行う必要がある。

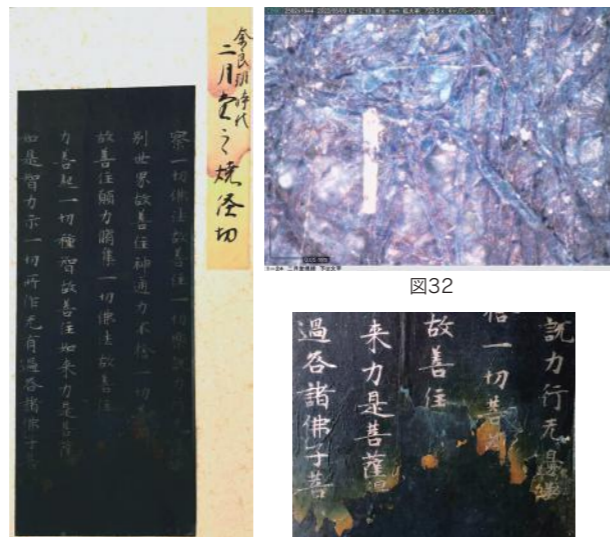


図31

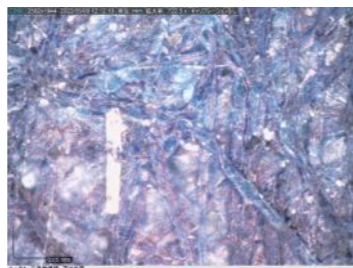


図32



図33

〔6. 行信願経〕

行信(生没年未詳)は奈良時代の僧侶。法相宗を修め、天平 10 年(738)閏 7 月、律師に任じられた。その後、法隆寺東院伽藍の復興に尽力したと伝える。『大般若経』など 2,700 巻の経論の書写を発願するが、その功を終えずに没した。神護景雲元年(767)9 月 5 日付で弟子の孝仁が遺志をついで完成したときの跋がある「行信願経」が法隆寺などに伝存する。

D4-23「奈良朝時代 行信願経之断簡」

大般若波羅蜜多經卷第四十七(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、非繊維細胞、墨界、繊維画像 706 倍。

料紙中には虫損箇所が多い。

繊維の間と奥には填料とみられる米粉(径0.007mm)がわずかに確

認できる。

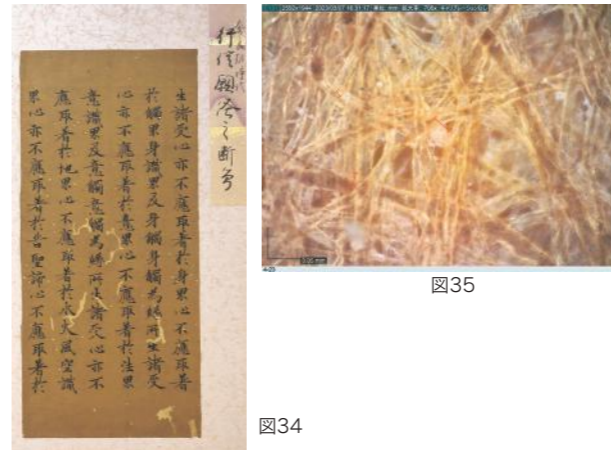


図34

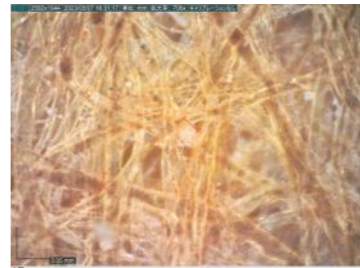


図35

D4-24「奈良朝時代 大般若経之断簡 法隆寺虫喰経」

大般若波羅蜜多經卷第三百一十六(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、非繊維細胞、墨界、繊維画像 706 倍。

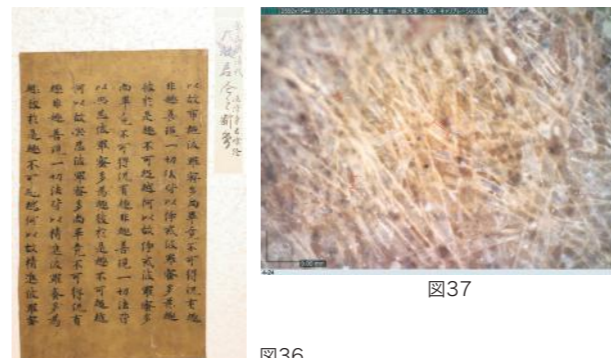


図36

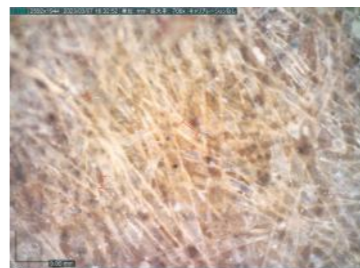


図37

F6-5「奈良朝時代 行信願経之断簡」

大般若波羅蜜多經卷第四百五十二(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界、繊維画像 707 倍。

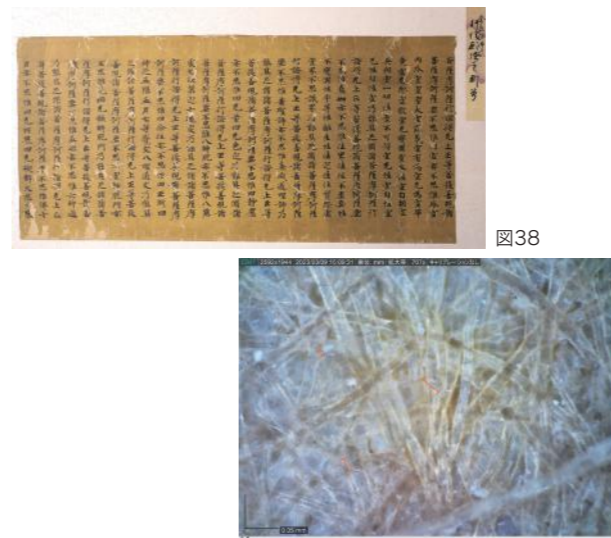


図38

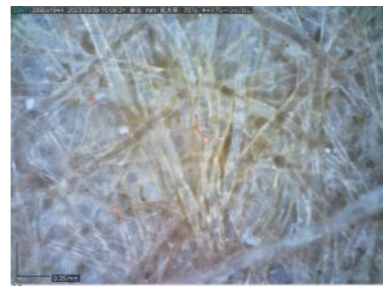


図39

これらの「行信願経」は、長寛 2 年(1164)以降に行われた修理で使用した裏打ち用の糊のために虫害を受けたとされ、俗に「法隆寺虫喰経」とよばれている〔注 14〕。今回調査を行った他の経典のなかには填料として用いた米粉のために虫損の被害をうけたものもあるが、この「行信願経」の場合は、填料はほんのわずかし確認できないため、今までの言説通り、虫損の原因は修理の裏打ちで使用された米粉であった可能性が高い。

(注 14)：田中塊堂「古写経総鑑」134 頁「行信僧都發願経」の項(鶴故郷舎出版部、1942 年)

〔7. 隅寺心経〕

奈良の法華寺の東北隅にある隅寺(現在の海龍王寺)にまとまって伝来した奈良時代を中心とする『般若心経』の総称である。隅寺については、天平 3 年(731)光明皇后の発願で皇后宮(藤原不比等邸跡)に建立され、同 7 年、留学僧玄昉が帰朝後に住持となったと伝える。「隅寺心経」のなかには、巻末に「天平勝宝七年料」の墨書がみえる。1 巻があることから、天平勝宝 7 歳(755)頃より弘仁時代(810 ~ 823)にかけて日課心経として書写されたとみられる。現在は海龍王寺をはじめ各間に所蔵されており、なかには、何紙も『般若心経』が継がれた状態のものが高野山や根津美術館に伝わっているという。

A1-21「奈良朝時代 隅寺心経之断簡」

般若波羅蜜多心経(玄奘)

黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非繊維細胞、墨界あり、繊維画像 704 倍。

日課心経として書写された「隅寺心経」の料紙がどのようにして供給されたかは不明である。この料紙の表面中央に白くみえる 0.02 mm ほどの糊は、この断簡を台紙に貼ったときのもので、填料は繊維の間に多くみえているさらに小さい粒であろう。

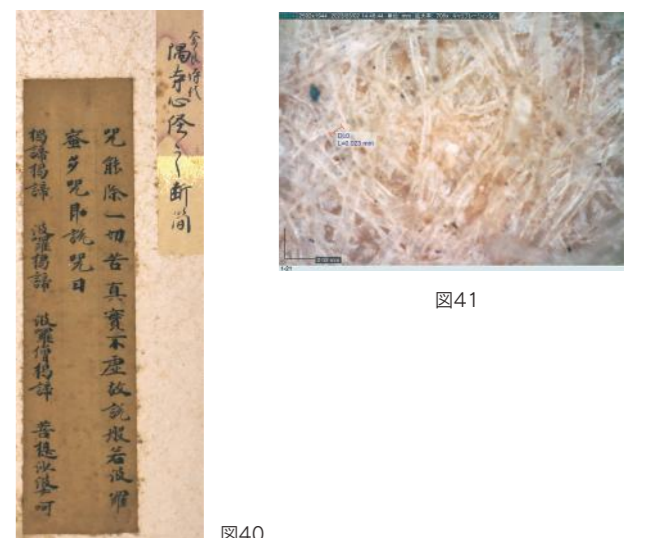


図40



図41

A1-22「奈良時代 隅寺心経之断筒」

般若波羅蜜多心経（玄奘）

黄薬染、楮紙、填料あり、非繊維細胞、墨界あり、繊維画像 704 倍。

この料紙の繊維の間には填料の粒が前号よりも多く含まれているのがわかる。日課として行われた写経であり、必ずしも決められた料紙を用いてはいないと思われる。

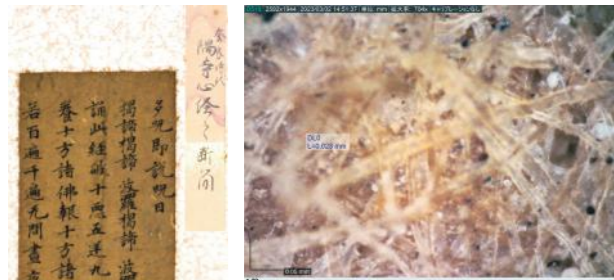


図42

A1-23「奈良朝時代 隅寺心経之断筒」

般若波羅蜜多心経（玄奘）

黄薬染、楮紙。填料あり、非繊維細胞、墨界あり、繊維画像 704 倍。

「隅寺心経」は 60 年以上にわたり日課として書写されている。填料がやや多いのは(図45)、丁寧に打紙をする手間を省いたためではないかとみられる。文字の異同があり、A1-22 のように末に「此経破十悪五逆九十五種邪道若欲供養十方」などの功德文を付すものがあるなど、書式が一定していないのは、テキストを用いず、暗誦した内容を書写するなど、それぞれの人の日課心経としてのあり方を反映したものであるためではないだろうか。

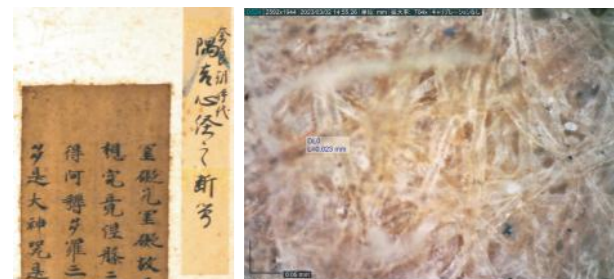


図44



図45

〔8. 平安～南北朝時代の大般若経〕

奈良時代中期の天平間には写経の全盛期であり、質・量ともに写経史の頂点に立つ時代でもあった。平安時代 12 世紀の院政期に入ると、写経の第二のピークを迎える。ここで取りあげる『大般若経』は、12 世紀頃の仏教儀礼が増大した時期以降に、五穀豊稔、天下太平の祈願や除災、虫除けや祈雨などを目的として作られた 1 セット 600 巻の経典である。平安時代後期より南北朝時代に書写され、それぞれ書写・校合の時期、目的や場所、伝来などが知られるものに注目し、その料紙を検討してみたい。

F6-14「伝藤原道長筆 大般若経之断筒」

大般若波羅蜜多経卷第六十四（玄奘）

黄薬染、楮紙打紙、填料わずか、墨界、延久元(1069)酉三月十日書写奥書、繊維画像 707 倍。



図46

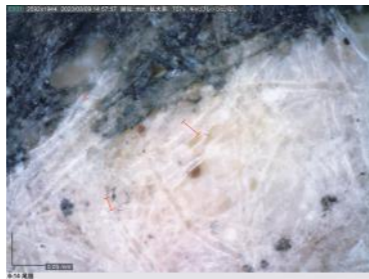


図47



図48

願主の名は記されていないが、書写奥書に「為行春追善於講堂書」とあり、亡くなった行春という人物の冥福を祈って行う追善のために、講堂において書かれたことがわかる。おそらくは有力者であったと思われる行春の近親者が、制作をはじめてまもない『大般若経』の書写事業に参加し、巻第 64 の書写を担当して、奥書にその旨を記している。料紙に引いた界線がまっすぐでないのも、不慣れのせいと考えられる。しかし経文は、バランスをとりながら一字一字をしっかりと書いており、「於」の字は経文と奥書とで変化をつけている。料紙の填料はわずかで、打紙を丁寧に施している(図47)。多くの人々に呼びかけて制作するためにやや良質の料紙を用いたと考えられる。

F6-8「藤原時代 不知題経之断筒」

大般若波羅蜜多経卷第四百四十五（玄奘）

黄薬染、楮紙、填料多い、墨界、朱区切点、長治3年(1106)2月11日

願主龍門寺上座頼因書写奥書、繊維画像 709.5 倍。

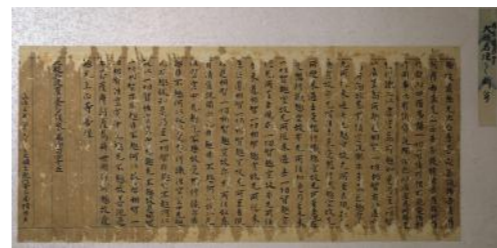


図49



図50



図51

龍門寺の上座である頼因は、この『大般若経』の願主の一人であった。何人かが書写を分担することになり、本経の奥書には「願主龍門寺上座頼因書」とあることから(図51)、頼因も自ら筆をとって書写したと考えられる。料紙の繊維の下に填料がまどまってみえており、全体として填料は多いようである(図50)。書写事業の規模は不明であるが、寄附を募って資金を集めたというよりは、何らかの目的をもって集まった人たちが発願者となり、それぞれが書写を行ったものであろう。

F6-10「藤原道長筆 大般若経之断筒」

大般若経波羅蜜多経卷第三百三十一

黄薬染、楮紙、填料あり、非繊維細胞、墨界、承安2年(1172)6月3日錦部光時書写校合奥書、繊維画像 707.5 倍。

奥書に「承安二年(歲次/壬辰)六月三日書写畢、施主錦部光時」とあり(図54)、錦部光時が施主として書写した『大般若経』巻第331である。本文および文中の校合を示す「一交了」の筆跡に対し、巻末にある光時の書写奥書の筆跡はかなり右下がりであるが、本文と奥書の筆使いを変えるのは他にも例があるので問題はない。奥書について別筆にて「□部朝臣覆了 本堂之経也」とあるのは少し時代が下り、おそらく錦部氏の一族の者が本経の修復を行ったときのもので、この『大般若経』の伝来を考える上で重要であろう。料紙については、多くの填料がみられるとともに、打紙については繊維の重なりや奥行きが感じられる程度に、軽い打紙が行われていることがわかる(図53)。



図52

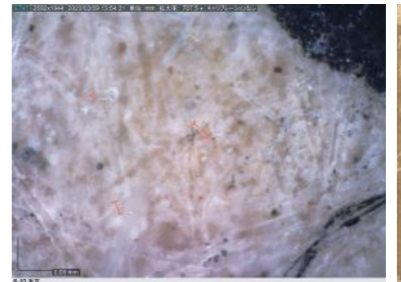


図53



図54

F6-9「藤原道長筆 大般若経之断筒」

大般若波羅蜜多経卷第一百一十（玄奘）

黄薬染、楮紙、填料多い、墨界、句切点、延文3年(1358)8月17日五師重懐書写校合奥書、繊維画像 708.5 倍。

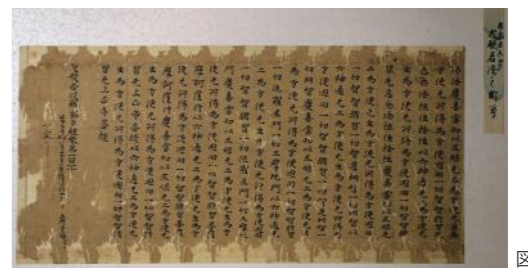


図55

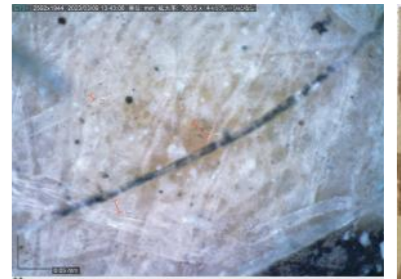


図56



図57

奥書に「延文三年(戊/戌)八月十七日以書続、次同一交了 五師重懐六十一」とあり(図57)、南北朝時代の延文3年(1358)8月に、61歳で五師の重懐が書写および校合を行った『大般若経』巻第110である。五師は僧侶、社僧の中から五人を選んで任じたもの、あるいは南都諸大寺または宮寺などで寺務をつかさどった役僧をさす。奥書には加点の旨を記していないが、経文の巻末2行に朱訓点(区切り点)が施されている。

料紙は、虫損のため修理が施されており、表面に糊がみえ、中央の表面には移動した墨付きの繊維が付着している(図56)。料紙の填料はわずかで、打紙を行っており、文字の墨の滲みはみられない。書写をした重懐については、東京大学史料編纂所のデータベースなどでも該当者は確認できていないが、料紙は五師である重懐のために揃えたものであったと考えられる。

F6-11 「伝藤原道長筆 大般若経之断筒」

大般若波羅蜜多經卷第四十五（玄奘）

黄蘗染、楮紙、填料あり、非繊維細胞あり、墨界あり、裏に摺仏あり(摺仏側から表の墨がみえる)、繊維画像 707 倍。



図58

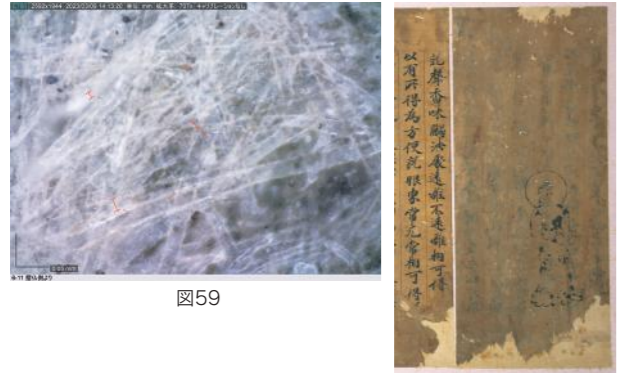


図59

図60

本経は、奥書などのある巻末部分ではなく、書写の背景は明らかでない。料紙の端裏に摺仏を捺すことは当初より考えていたのか、料紙には填料を少し加えて、透明度を抑えている。のちに断筒となったから、6 行分を切り取って摺仏を表にしたのであろう。摺仏側から撮影した顕微鏡の画像(図 59)では、文字の墨がほんやりと透けてみえる。

以上とりあげたいずれの『大般若経』も、料紙の天地などに虫損が著しい。その理由としては料紙中にみられる填料が米粉であることも影響している。『大般若経』は 600 巻という大部な經典であり、料紙を揃えるだけでも大きな労力を必要とした。稀に經典の紙背に「紙屋の印」とよばれる小さな印が捺されているのは、料紙を調達する集団などが存在したことを示すものである。

〔9. 漉き返し紙〕

前項にて取り上げた『大般若経』のように、多くの料紙を必要とする書写事業が展開するなかで、漉き返しの料紙を利用する例が次第に増加している。11 世紀後半以降、着色した繊維を料紙に漉きかける藍紙(らんし)、雲紙、飛雲、羅文紙(らもんし)など、日本独自のさまざまな漉きかけの技法が行なわれた。そのなかには、再生繊維を用いたものがみられることに注目したい。

B2-34 「藤原時代 法華経之断筒」

妙法蓮華経卷第五（鳩摩羅什）

藍紙(雁皮紙に藍染めの再生繊維を漉きかけたもの。再生繊維に濃淡と墨痕あり)、填料あり、金銀切箔散あり、銀界あり、繊維画像 図 62、図 63 : 707 倍。

図 62 は、雁皮紙の上に藍染の繊維を漉きかけている。よくみると、漉きかけた繊維には、藍色の濃い、薄い、ほとんど色がないもの、さらに太い、細いがある。図 63 にもその特徴があらわれている。これらは繊維の状態ではなく、紙の状態になってから藍染めしたことを意味する。また図 63 の左下と右上に墨痕がもくろこんでいるので、文字の書かれた紙を藍染めしてから細断し、さらにすり鉢で細かく繊維状にした

と考えられる。おそらく親しい人物からの書状などを藍染めしたものを繊維に戻してから装飾に用いたのであろう。しかも墨痕は通常よりもかなり多く確認できることから、特別な書状などの漉き返しであることをあえて強調しているとも考えられる。使用済みの文書料紙を藍で染めて經典を書写する例は、中等寺経にも確認できる(注 15)。なお、図 62 の右上は金箔である。

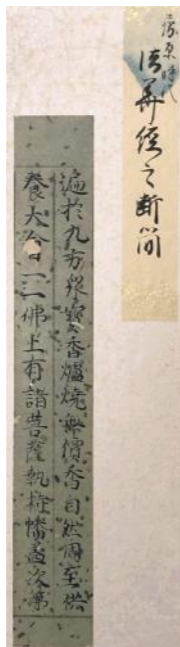


図61

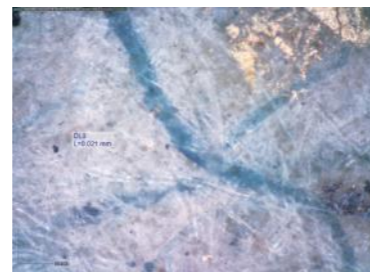


図62



図64

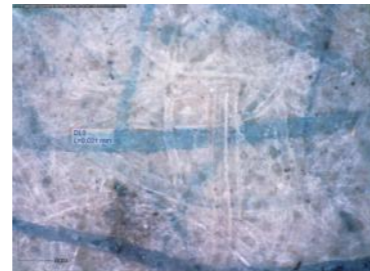


図63

〔注 15〕：坂元正典「清衡経料紙中の墨書について」(『美術研究』第 158 号、1951 年 1 月)

B2-35 「戸隠切 聖徳太子」

妙法蓮華経卷第二（鳩摩羅什）

楮紙と雁皮紙の漉き返し紙、填料あり、金銀箔散あり、墨痕が繊維中に入り込んでいる、繊維画像 図 67 : 703 倍、図 68 : 785 倍。

一字一仏の考え方にもとづき、一行に雲母刷した八基の宝塔の中

に、経文を書写している。戸隠神社に伝来した『法華経』で、筆者は藤原行成五代の子孫藤原定信(1088 ~ 1154 ~ ?)と推定されている。早くに散佚してしまい、巻第一が分割された二巻と、巻第二・巻第四の残巻がそれぞれ現存しており、巻間に伝来した経巻の断筒は「戸隠切」と呼ばれる。

料紙は雁皮紙で、鼠色、薄藍、薄紅色があるといわれているが、これまでに稿者が披見したのは鼠色のみである。この料紙は、楮紙と雁皮紙の再生繊維を用いた漉き返し紙(図 67)で、後世の修理のために繊維に多くの糊などが付着してわかりにくくなっているが、料紙内部に墨痕(図 67)や植物のようにもみえる混入物(図 68)がある。伝来の過程で破損が進行した断筒 2 紙を上下に貼り合わせて2行分としており(図 66)、それぞれ巻第二の部分であるが経文が連続していない。

定信は、23 年かけて一筆一切経(5048 巻)を書写し、64 歳の時に完成している。経文を早く書写するため右上がりの書風となつたと考えられており、この「戸隠切」は右上がりの書風から、定信筆と認められる。



図65

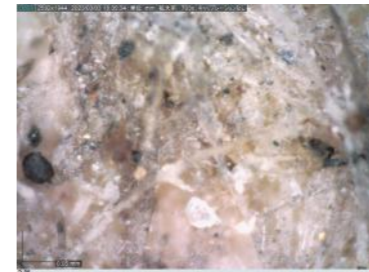


図67



図66

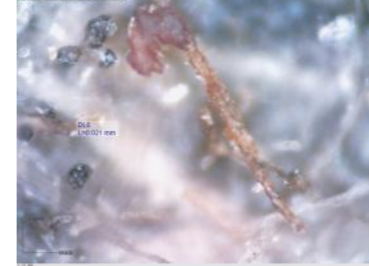


図68

C3-23 「鎌倉時代 不知題経之断筒(法隆寺薄墨経)」

大方廣佛華嚴経卷第十(佛驮跋陀羅)

楮紙の漉き返し紙、繊維の下に墨痕がうつすらとみられる。填料あり、墨界、繊維画像 703 倍。

「法隆寺薄墨経」との極めがある。「薄墨」が漉き返し紙か、あるいは薄墨に着色したものかを検証すると、繊維の裏側に墨痕が残っているため、漉き返し紙であると認められる(図 70)。もし薄墨色の料紙にするために、薄墨で着色した場合には、顕微鏡でみると、料紙の着色した場所がうつすらと薄墨色に染まり、その表面に細かい墨の粒子が散らばっているのが見分けることができる。

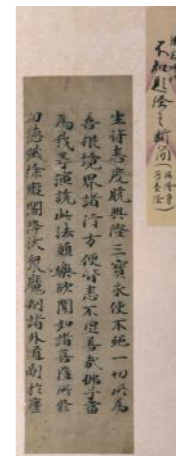


図69

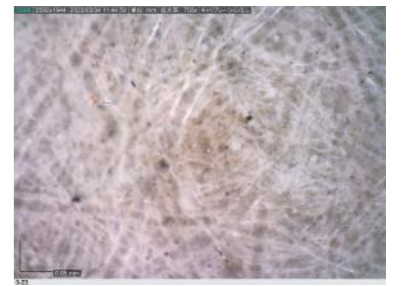


図70

C3-24 「鎌倉時代 不知題経之断筒」

瑜伽師地論卷第八十五(玄奘)

楮紙の漉き返し紙、填料あり、質目がはっきりしている、墨界あり、繊維画像 722.5 倍。

この料紙は、繊維の下に墨痕が入り込んでおり(図 72)、漉き返した紙を使用していることがわかる。文字が書かれた紙を漉き返した場合、その色は薄墨色である。しかし、なかには漉き返し紙であることを強調するために墨を追加しているものもある。たとえば、紙漉きに竹篔を使用している場合は、ひごとひごの間は水が下に抜けるときに繊維が積もって量が多くなっている。本経の場合、墨を加えたことで、繊維の量が多い質目の部分の色がさらに濃くなっていると考えられる。

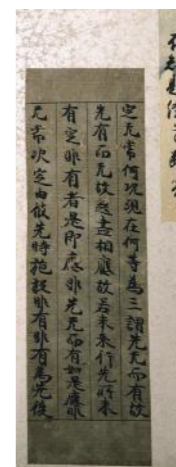


図71

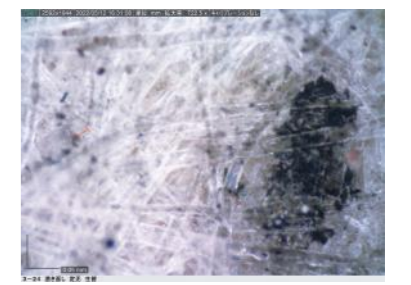


図72



図73

C3-38 「鎌倉時代 法華経之断筒」

大毘盧遮那成佛神變加持経卷第七(善無畏)

楮紙打紙、填料あり、銀箔散、墨痕あり、金界あり、繊維画像 702 倍。

『大日経』として知られる真言密教の最も重要な經典を小型の装飾本にしたもの。高貴な女性の求めに応じて製作されたのであろう。

料紙には、填料とともに繊維の重なりの中に墨痕や着色繊維が確認できる(図 75)。おそらく所縁のある人物からの書状などを漉き返した料紙を用いていると考えられる。

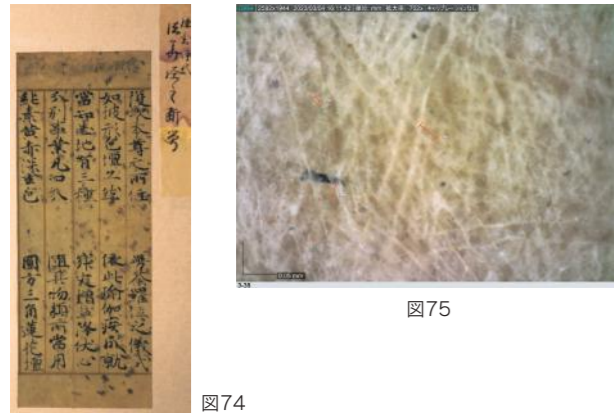


図74

C3-15「笠置切(万里小路宣房)」

妙法蓮華經卷第七(鳩摩羅什)

楮紙打紙、填料わずか、金界あり、繊維画像 814.5倍。

繊維の下に墨痕がみえることから(図78)、漉き返しの可能性がある。

料紙は薄様の斐紙(雁皮紙)と言われているが、顕微鏡で確認すると、楮紙を打紙している。金界を引いた料紙に肥度の著しい特徴的な行書体で書写(図77)されたものである。



図76



図77

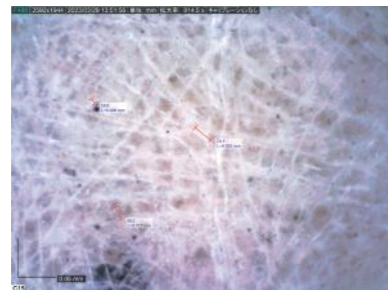


図78

後醍醐天皇の親政下で重用された万里小路宣房(1258～1348)が、正中2年(1325)から嘉暦元年(1326)にかけて書写した『法華経』の断簡。宣房は元亨4年(1324)5月に「五部大乘経」205巻を一字三礼しながら一筆書写を遂げる(注16)など、信仰に篤い人物であったことがうかがえる。

「笠置切」の名の由来は定かではないが、この経が笠置寺に伝来したか、あるいは元弘の変(元弘元年[1331])で後醍醐天皇が大和の笠置寺に拠ったことと関連して名付けられたものと思われる。

(注16)：興福寺の「春日社本談議屋室物目録」の中には「五部大乘経式百五巻。万里小路宣房卿一字三礼。元亨四年五月十五日写経と在之云々」という記録がある。

C3-16「笠置切(万里小路宣房)」

佛説觀音賢菩薩行法經(曇無蜜多)

楮紙打紙、填料わずか、金界あり、繊維画像 702倍。

図81の左下には、繊維の下に墨痕があり、他の場所にもいくつか確認できることから、漉き返し紙と考えられる。

正中元年(1324)後醍醐天皇の倒幕計画が発覚した正中の変の際、万里小路宣房は勅使として鎌倉に下向して事件を落着させた。「笠置切」はその翌年から1年の間に書写したものである。

京都においては、さまざまな倒幕運動が計画されるあわただしい状況のなかで、宣房が書写した「頓写経」といえるであろう(注17)。

料紙をみると、楮紙にわずかに填料を加えて丁寧に打紙をしている。さらに図81の右上、左下には繊維の下に墨痕が確認され、漉き返し紙と考えられる。書写の背景、こだわりの料紙と個性的な筆跡からは、時代の大きなうねりのなかで、自分がどう生きるかについてのゆるぎのない信念がうかがえる。



図79



図80

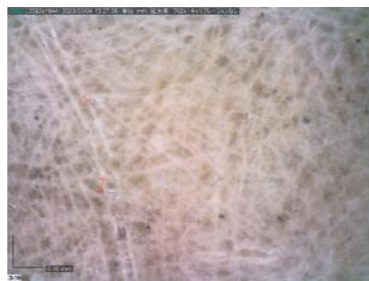


図81

(注17)：前掲注14 田中塊堂著書475頁「万里小路宣房願經妙法蓮華経(笠置切)」の項。

〔10. 料紙の再利用〕

平安時代以降、受け取った書状や文書の裏を利用して、写経をしたり、日記を書くことが盛んに行われた。これは料紙の再利用を意味するのであるが、同時にかつては表にあった書状や文書を紙背文書として保存することにもなる。普段はあまり参照することはなくとも、いざというときに卷子装や折本装となった経典や日記の裏を探せば、書状や文書の書き方など必要な情報を見つづけることができる一種の文書整理術といえるだろう。

G7-8「鎌倉時代 大般涅槃経之断簡 高山寺文書切」

大般涅槃経卷第三十(曇無讖译)

黄薬染、楮紙、填料あり、墨界あり、紙背文書あり、繊維画像 図83：706.5倍、図85：707.5倍。

紙背「□□奉渡木像(破壊/至極)不動尊一鉢事/□□者能延六月之□誓也、任嘉□□/□□於明王之加護所祈者、現當一世□□

/□□申懐也、開障路於利釵之即除□□/□□之而名護念々有其□者歟、然□□/□□木堤歸依之懇忠争可单始終□□/□□抑留畢、縦歸坐本有常住之導□□/□□宜億念南無大聖之尊像率□□/□□渡□□老眼恭敬之志、併仰知見□ 延慶元年(1308)(戊申)極月三日」

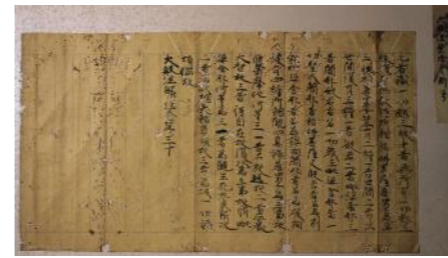


図82

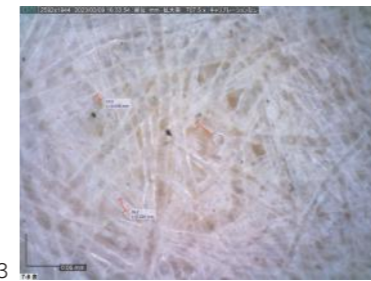


図83

経典を書写するために文書の裏を利用している。文書は、延慶元年(1308)に木造の不動尊1体について作成した文書である。差出書がないが、おそらく文中に見える能延が、何らかの事情で抑留されている不動尊が破壊されていることを案じて、その返還を求めたものと思われる。書き止しではあるが、提出用に品質を考慮して、楮の繊維でやや厚手の上質な料紙を用いている。再利用するには文書の折しわなどを平らにする必要があるため、料紙を湿らせた上で打紙を施し、さらに防虫のために黄薬染めをしてから経典を書写している。

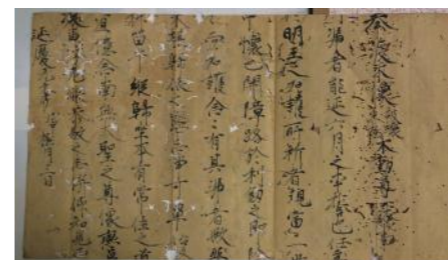


図84

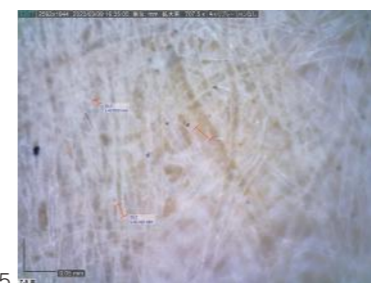


図85

G7-9「鎌倉時代 大般涅槃経之断簡 高山寺文書切」

大般涅槃経卷第二十四(曇無讖译)

黄薬染、楮紙、填料あり、墨界あり、朱点、墨仮名あり、繊維画像

図87：707.5倍、図89：707.5倍。

紙背「畏奉候了、今日□□/岡屋殿御月忌阿弥陀□□/給候了、即奉□□/轉読、能>訪申候、□□/此間於□誦之□□/事候、以此旨可令□/」



図86

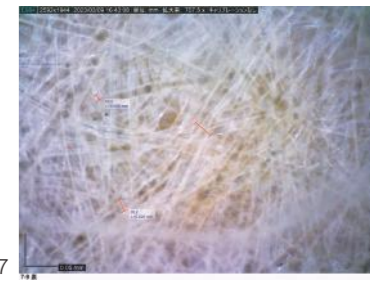


図87

図88の文中2行目の「岡屋殿」は、近衛家第三代家実の三男で、四条・後嵯峨・後深草天皇の摂政・関白を勤めた藤原兼経(1210～59)である。晩年に山城国宇治郡の近衛家領岡屋荘にあった別業岡屋殿に住み、「岡屋殿」と称された。

この文書は、書き出しの「畏奉候了」の文言からもわかるように、藤原兼経の月忌阿弥陀経会における転読に関する内容を上申したものである。料紙はやや厚手の楮紙で、前号と同じ方法で打紙を施し、黄薬染めをしてから経典の書写を行っている。



図88

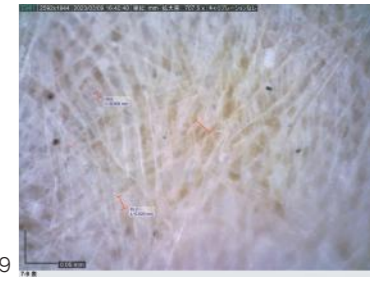


図89

以上、2通の紙背文書の料紙からいえることは、ともに上役・上官などに自分の意見や事情を記載して報告や申し立てをするための書類であり、日常に使用する料紙とは異なる上質な料紙を使用している。このような上質な紙だからこそ、紙背に経典を書写して徳行とすることができ、一方で文書の保存にもなるという特徴をもっているといえる。

## IV. 紀要 1

本調査では、奈良時代中期の天平期の料紙として、「光明皇后願経」の写経所を創設して「五月一日経」という大規模な一切経の書写事業を実施した光明皇后のもと、朝廷の紙漉き所として設置された紙屋院が行った様々な技術革新の成果の一つであったと考えられる。

これらの技術革新の流れで、白く透き通った繊維に独特の塵が混じった特別な料紙が現れる。これが天平19年(747)の正倉院文書に「檀紙」と記される茶毘紙(マクミ紙)である。本論では、4件の茶毘紙をとりあげ、その特徴を示す靱皮繊維に含まれる樹脂の粒、白皮の表面の黄色い繊維の顕微鏡画像を紹介し、他の料紙と異なる茶毘紙の特徴を明確に示した。

さらに茶毘紙を使用した写経として名高い「大聖武」の成立過程を解き明かす存在と考える東博本「称讚浄土経」を取り上げた。マクミの繊維に対し、雁皮と楮それぞれの配合を変えて混抄した料紙であるが、写経所において、表紙、本紙の前半と後半で、繊維の種類と配合の異なる料紙を選んで書写に使用している。こうした複雑な構成をもつ料紙製作および書写を行った目的は、光明皇后が計画している特別な經典の書写を実現するための試作であると位置付け、紙屋院で実験的に製作された料紙であると考えた。そしてこのような茶毘紙を用いた実験は、奈良朝写経の名品である「大聖武」の製作につながっていくという考えを呈示した。今後は、本調査をふまえ、マクミ紙について多角的に検討して、「大聖武」の製作時期、その背景としての光明皇太后や孝謙(称徳)天皇と紙屋院の関係についての研究を深めていきたい。

次に埴料については、これまで茶毘紙において添加の意味が検討されることがなかった点に注目した。従来、「大聖武」に限って胡粉入りであるといわれていたが、多寡の差はあるが、「大聖武」「中聖武」「小聖武」にはいずれも料紙中に埴料とみられる白い粉末が入っていることが明らかとなった。この事実をふまえて、蛍光X線分析調査により、埴料の成分を検討し、茶毘紙において埴料を添加する目的が何であるかを検討する予定である。さらにその原料の入手先や分量などから、茶毘紙の製作を担当したとみられる紙屋院の活動に関して新たな課題が生まれるであろう。

料紙に使用する埴料は、米粉や胡粉がある。そして一般的に、料紙の透明感を抑えて色を白くする、紙面をより平滑にして文字を書き易くし、滲みが少なくなるなどの理由で、奈良より現代にいたるまで広く使われている。しかし、埴料に米粉を多く使用した場合、虫損の被害をうけたり、米粉が繊維と繊維の結合を妨げ、紙を柔らかく毛羽立ちし易くするなど、保存上の問題が発生することがある。一方で、本調査でとりあげた奈良時代の「光明皇后願経」における麻と雁皮の混抄の料紙、あるいは「行信願経」、平安～南北朝時代の『大般若経』、「笠置切(万里小路宣房筆)」「法華経」巻第七などの調査結果に注目すると、埴料としての米粉の使用はわずかであり、丹念な打紙によって料紙の平滑さなどの性能を高めている例が確認できる。これは、思いを込めた大切な經典を永く伝えるために、埴料の過度の使用が料紙を弱くすることを懸念したためではなかったかと考えるのである。

埴料の使用の問題は、紙の原料の性質とも関係してくる。紙の原料の中の非繊維細胞の一つであるリグニンは、繊維と繊維の結合を強くする働きをもっている反面、紙を黄ばませる性質がある。紙を作る際、原料をよく洗う作業を行うが、洗うことによってリグニンなどの非繊維細胞が減ることとなり、更に過度に埴料を添加した場合は紙が弱まる嫌いがある。つまり、料紙を白いままで永く保存するには、紙料に対して使用する埴料の種類と量を適切に判断する必要がある。今回の調査を通して、料紙における埴料と非繊維細胞の量的な関係をみていると、紙料に応じた埴料の使用に関しては、時代時代の要請や経験則に応じて、変化が加えられていたと考えられる。つまり、埴料の存在は、その時代における紙に対する人々の考え方を反映するものなのである。

料紙の研究の課題には、紙の組成の問題にとどまらず、料紙製作における効率化や品質向上、利便性と保存のバランス、さらには繊維の再利用(リサイクル)など、現代の生活とも密接な関係がある。料紙の研究では、こうした先人の歴史からできるだけ多くの知恵を学び、さらに継承、発展させることが大切であるという思いを新たにした。そして、これらの料紙研究は、稿者が従来とりくんでいる奈良～鎌倉時代にかけての宮廷の紙漉き所である紙屋院の実態解明につなげることで、日本における料紙研究の進展に寄与できると考えている。

本調査では顕微鏡で繊維を観察するだけではなく、料紙と文字の変遷、書写の背景などもあわせて検討した。これらの作業は、料紙の製作や書写に関わった各時代の人々の生き方とをとおして、經典を書写することの意味を、ミクロとマクロの視点から改めて考える機会となった。今後、繊維の再利用については、奈良、平安、鎌倉時代における紙屋院の活動との関連、地方における漉き返し紙の普及なども含めて、さらに検討を進めていくつもりである。

本研究の遂行にあたり、貴重な資料を提供頂いた特種東海製紙PAM館長の千葉寿子氏に深謝の意を表します。

くするなど、保存上の問題が発生することがある。一方で、本調査でとりあげた奈良時代の「光明皇后願経」における麻と雁皮の混抄の料紙、あるいは「行信願経」、平安～南北朝時代の『大般若経』、「笠置切(万里小路宣房筆)」「法華経」巻第七などの調査結果に注目すると、埴料としての米粉の使用はわずかであり、丹念な打紙によって料紙の平滑さなどの性能を高めている例が確認できる。これは、思いを込めた大切な經典を永く伝えるために、埴料の過度の使用が料紙を弱くすることを懸念したためではなかったかと考えるのである。

埴料の使用の問題は、紙の原料の性質とも関係してくる。紙の原料の中の非繊維細胞の一つであるリグニンは、繊維と繊維の結合を強くする働きをもっている反面、紙を黄ばませる性質がある。紙を作る際、原料をよく洗う作業を行うが、洗うことによってリグニンなどの非繊維細胞が減ることとなり、更に過度に埴料を添加した場合は紙が弱まる嫌いがある。つまり、料紙を白いままで永く保存するには、紙料に対して使用する埴料の種類と量を適切に判断する必要がある。今回の調査を通して、料紙における埴料と非繊維細胞の量的な関係をみていると、紙料に応じた埴料の使用に関しては、時代時代の要請や経験則に応じて、変化が加えられていたと考えられる。つまり、埴料の存在は、その時代における紙に対する人々の考え方を反映するものなのである。

料紙の漉き返しについては、11世紀後半に藍染の楮繊維を雁皮紙に漉きかけた料紙を用いた『法華経』の例を取り上げた。この料紙には、漉きかけた楮繊維の藍色に濃淡の斑があり、ほとんど染まっていない部分も含まれていた。このように藍が均一に染まっていないのは、繊維の状態で染色を行わず、紙の状態で藍染めをしたことを示している。しかも、漉きかけた繊維の内部には多くの墨痕が確認できるので、文字が書かれた使用済みの料紙を藍で着色してから切り刻み、白などで磨り潰して繊維に戻したものを漉きかけたことがわかる。関連する技法は、使用済みの文書を藍で着色して經典の書写に用いた「中尊寺経」の事例が知られており、その応用として考えることができる。

料紙研究の課題には、紙の組成の問題にとどまらず、料紙製作における効率化や品質向上、利便性と保存のバランス、さらには繊維の再利用(リサイクル)など、現代の生活とも密接な関係がある。料紙の研究では、こうした先人の歴史からできるだけ多くの知恵を学び、さらに継承、発展させることが大切であるという思いを新たにした。そして、これらの料紙研究は、稿者が従来とりくんでいる奈良～鎌倉時代にかけての宮廷の紙漉き所である紙屋院の実態解明につなげることで、日本における料紙研究の進展に寄与できると考えている。

本調査では顕微鏡で繊維を観察するだけではなく、料紙と文字の変遷、書写の背景などもあわせて検討した。これらの作業は、料紙の製作や書写に関わった各時代の人々の生き方とをとおして、經典を書写することの意味を、ミクロとマクロの視点から改めて考える機会となった。今後、繊維の再利用については、奈良、平安、鎌倉時代における紙屋院の活動との関連、地方における漉き返し紙の普及なども含めて、さらに検討を進めていくつもりである。

本研究の遂行にあたり、貴重な資料を提供頂いた特種東海製紙PAM館長の千葉寿子氏に深謝の意を表します。

本調査では、奈良時代中期の天平期の料紙として、「光明皇后願経」の写経所を創設して「五月一日経」という大規模な一切経の書写事業を実施した光明皇后のもと、朝廷の紙漉き所として設置された紙屋院が行った様々な技術革新の成果の一つであったと考えられる。

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
001	A1-1	奈良朝時代 不知題経之断簡	四分律比丘戒本 (佛陀耶舎)	<b>餘時者病時</b> 作衣時施衣時道行時乘船時大衆集時沙門施食時此是時若比丘至白衣家請比丘與餅麩飯若比丘欲須者當二三鉢受還至僧伽藍中應分 <b>與餘比丘食</b>	黄蘗染、楮紙、埴料わずか、墨界
002	A1-2	奈良朝時代 不知題経之断簡	金光明最勝王經 僧慎爾耶藥叉大將品第十九 (義浄)	<b>我於難思智境而能</b> 通達世尊如我於一切法正知正曉正覺能正觀察世尊以是因縁我藥叉大將名正了知以是義故我能令彼說法之師言詞辯了具足莊嚴亦令精氣從毛孔入身力充我於難思智境而能通達世尊如我於一切法正知正曉正覺能正觀察世尊以是因縁我藥叉大將名正了知以是義故我能令彼說法之師言詞辯了具足莊嚴亦令精氣從毛孔入身力充足威神勇健難思智光皆得成就得正憶念無有 <b>退屈增益彼身</b>	黄蘗染、楮紙、埴料あり、墨界、訓点
003	A1-3	奈良朝時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三十 (玄奘)	<b>何可言即苦</b> 聖諦若遠離若不遠離增語是菩薩摩訶薩即集滅道聖諦若遠離若不遠離增語是菩薩摩訶薩善現汝復觀何義言即苦聖諦若有爲若無爲增語非菩薩摩訶薩。即集滅道聖諦若有爲若無爲增語非菩薩摩訶薩耶 <b>世尊若苦聖諦</b>	黄蘗染、楮紙、雁皮の混抄か、埴料あり、非繊維細胞、墨界、朱点
004	A1-4	奈良朝時代 不知題経之断簡	占察善惡業報經卷上 出六根聚經中 (菩提燈)	<b>求佛事當得獲</b> 八十七者求供具當得獲八十八者求資生得如意八十九者求資生少得獲九十者有所求皆當得九十一者有所求皆不得九十二者有所求少得獲九十三者有所求得如意九十四者有所求速當得 <b>九十五者</b>	楮紙、雁皮の混抄か、埴料あり、墨界
005	A1-5	奈良時代(原文ママ) 不知題経之断簡	根本説一切有部毘奈耶卷第五 (義浄)	<b>白佛王言聖者</b> 可往白佛時畢隣陀婆蹉以事白佛佛言若爲僧衆當可受之時畢隣陀婆蹉奉教而受 <b>時給侍人雖施入僧諸</b>	黄蘗染、楮紙打紙、雁皮の混抄か、埴料あり、墨界、朱点
006	A1-6	奈良朝時代 不知題経之断簡	占察善惡業報經卷上 出六根聚經中 (菩提燈)	<b>如是之法而</b> 返隨逐世間ト筮種種占相吉凶凶等事貪著樂習若樂習者深障聖道善男子欲學木輪 <b>相者先當刻</b>	楮紙、雁皮の混抄か、埴料あり、墨界
007	A1-7	奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説無量清淨平等覺經卷第二 (支婁迦讖)	<b>金根水精瑩</b> 琉璃節珊瑚枝虎珀葉車華銀實水精樹者水精根琉璃莖珊瑚節虎珀枝車葉白玉華金實琉璃樹者琉璃根珊瑚莖 <b>虎珀節白玉枝車</b>	黄蘗染、楮紙打紙、埴料わずか、非繊維細胞、墨界
008	A1-8	奈良朝時代 不知題経之断簡	大智度論釋發趣品第二十之餘卷五十 (鳩摩羅什)	<b>受想行識識</b> 相空故若人欲使眼空出。是人爲欲使無相法出。若人欲使耳鼻舌身意空出是人爲欲使無相法出。若人欲使乃至意觸因縁生受空出是人爲欲使無相法出。何以故須菩提眼空不出三界。亦不住薩婆若乃至意觸 <b>因縁生受空不出三界</b>	黄蘗染、楮紙、埴料あり、墨界
009	A1-9	奈良時代(原文ママ) 不知題経之断簡 魚養	大方廣佛華嚴經卷第二十 (實叉難陀)	<b>智慧莊嚴</b> 利益衆生悉令滿足隨本誓願。皆得究竟。於一切法中智慧自在令一切衆生普得清淨。念念遍遊十方世界。念念普詣不可説不可説 <b>諸佛國土念念</b>	黄蘗染、楮紙打紙、雁皮混抄か、墨界
010	A1-10	奈良朝時代 不知題経之断簡 魚養	根本説一切有部毘奈耶卷第十 (義浄)	<b>合爲少飲食</b> 實無上人法自稱得耶彼便答曰從合不合我等已作時諸苾芻樂少欲者皆共譏嫌呵責非法云何汝等爲貪飲食實無上人法自稱得耶時諸苾芻以縁白佛佛以此縁集 <b>苾芻衆</b>	黄蘗染、楮紙打紙、雁皮の混抄か、埴料わずか、墨界
011	A1-11	奈良朝時代 不知題経之断簡 (魚養)	大方廣佛華嚴經卷第二十一 (又難陀)	<b>念演一法</b> 乃至演不可説不可説法念一根種性乃至不可説不可説根種種性念一根無量種種性乃至不可説不可説根無量種種性。念一煩惱種種性乃至不可説不可説煩惱種種性念一三昧種種性乃至不可説不可説 <b>三昧種種性</b>	黄蘗染、楮紙打紙、埴料あり、非繊維細胞、墨界
012	A1-12	奈良朝時代 不知題経之断簡 白麻帝墨書聖武 天皇大和切	大寶積經卷第二十一 (菩提流志)	<b>無上而發趣</b> 如是諸菩薩安住此修行能於佛法中以速而發趣清淨佛國土攝受諸聲聞及諸菩薩等功德莊嚴事 <b>大寶積經卷第二十一</b>	楮紙打紙、雁皮の混抄か、埴料わずか、墨界
013	A1-13	● 奈良朝時代 不知題経之断簡 白麻帝墨書聖武 天皇大和切	大方廣佛華嚴經卷第二十一 (佛駄跋陀羅)	<b>解法界無壞復次菩薩摩訶薩</b> 善根如是迴向以此法施所攝善根令一切衆生成大法師住一切佛無量自在令一切衆生作無上法師安立衆生於一切智令一切衆	楮紙打紙、埴料わずか、墨界



「大日本古写経」リスト

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
014	A1-14	● 奈良朝時代 大和切 小字(茶毘帛小聖武)	根本説一切有部 毘奈耶雜事卷第三十四 (義淨)	<b>三十二相唯見三十餘之二相疑不能見所謂陰相及以舌相説伽他</b> 曰昔聞大牟尼具相三十二我今觀佛體一相遍身無未親人中尊或容在隱處廣長妙舌相口中人不知惟願爲現相除我心中疑正覺大名聞世人難得見 <b>根本説一</b>	マユミと楮の混抄、 填料あり、墨界
015	A1-15	● 奈良時代(原文ママ) 大和切中字 (茶毘帛中聖武)	根本説一切有部 毘奈耶雜事卷第三十九 (義淨)	<b>佛入大涅槃並悉於前</b> 已歸圓寂而今世尊復與一萬八千苾芻同般涅槃然有無量劫長壽諸天皆起歎惜復生譏議何不結集三藏聖教豈令如來甚深妙法成灰燼耶咸皆報知可共結集斯爲 <b>大事衆皆言善</b>	マユミと楮の混抄、 填料わずか、墨界
016	A1-16	奈良朝時代 不知題経之断簡 大和切	佛説稱揚諸佛功德經 (吉迦夜)	<b>常念不忘却十四劫生死之罪</b> 復次舍利弗東方去此喻月世界度二千一億佛利有世界名曰 <b>星王</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、墨界
017	A1-17	● 奈良朝時代 灌頂経之断簡	佛説灌頂隨願往生十方淨土經卷第十一 (帛戸梨蜜多羅)	<b>龍八部一切鬼神汝等衆輩聞説</b> 十方淨佛國土復聞説是那舍長者因縁罪福生信心不普廣菩薩復從坐起白世尊言説是十方諸佛淨土無量功德莊嚴快樂復得聞是是那舍因縁世尊又説衆事因縁甚善心 <b>大歡喜踊躍無量世尊説是多所利</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料わずか、非纖維細胞、墨界
018	A1-18	奈良朝時代 大般若経之断簡	楞伽阿跋多羅寶經卷第四 (求那跋陀羅)	<b>殺生者見形起識</b> 深味著故不應食肉彼食肉者諸天所棄故不應食肉令口氣臭故不應食肉多惡夢故不應食肉空闲林中虎狼聞香故不應食肉 <b>令飲食無節</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、墨界
019	A1-19	奈良朝時代 法華経之断簡 (染紅帛)	妙法蓮華經卷第四 (鳩摩羅什)	<b>五欲自恣於某年日月</b> 以無價寶珠繫汝衣裏今故現在而汝不知勤苦憂惱以求自活甚爲癡也汝今可以此寶貿易所須常可如意無所乏短佛亦如是爲菩薩時教化我等令發一切智心而尋廢忘不知不覺既得阿羅漢道自謂 <b>滅度資生艱難得少爲足一切</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、墨界、白点
020	A1-20	奈良朝時代 薬師寺大般若経之断簡 魚養	大般若波羅蜜多經卷第一百一十九 (玄奘)	<b>無二無二分故世尊</b> 云何以集滅道聖諦無二爲方便無生爲方便無所得爲方便迴向一切智智安住眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離 <b>生性法定</b>	黄蘗染、楮紙、填料 わずか、墨界
021	A1-21	● 奈良時代(原文ママ) 隅寺心経之断簡	般若波羅蜜多心經 (玄奘)	<b>大神咒是大明咒是無上咒是無等等咒</b> 能除一切苦眞實不虛故説般若波羅蜜多咒即説咒曰揭諦揭諦般羅揭諦般羅僧揭諦菩提沙婆 <b>啊般若波羅蜜多心經</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、非纖維細胞、墨界
022	A1-22	● 奈良時代(原文ママ) 隅寺心経之断簡	般若波羅蜜多心經 (玄奘)	般若波羅蜜多咒即説咒曰揭諦揭諦般羅揭諦般羅僧揭諦菩提沙婆 <b>啊</b> 誦此經破十惡五逆九十五種邪道若欲供養十方 ※末に功德文あり	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
023	A1-23	● 奈良朝時代 隅寺心経之断簡	般若波羅蜜多心經 (玄奘)	<b>無罣礙無罣礙故無有恐怖</b> 遠離顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等 <b>咒能除</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
024	A1-24	● 奈良朝時代 二月堂之焼経切	大方廣佛華嚴經卷第二十六 (佛驮跋陀羅)	<b>陀羅尼力分別觀察</b> 一切佛法故善住一切樂説力行無邊差別世界故善住神通力不捨一切菩薩所行故善住願力修集一切佛法故善住波羅蜜力善起一切種智故善住如來力是菩薩得如是智力示一切所作無有過咎諸佛子菩薩 <b>此地不可壞故</b>	紺紙銀字、幅15～ 25μの楮繊維、打紙、 銀字の表面に茶色粒状のものが確認できる、 楮繊維がフィブリル化している、 銀界
025	A1-25	奈良朝時代 不知題経之断簡	阿毘達磨俱舍釋論卷第二十二 (婆藪盤豆、眞諦)	<b>約内所取</b> 現世諸陰執説爲我今此別言於義復不開顯非我等	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、非纖維細胞、墨界
026	A1-26	奈良朝時代 不知題経之断簡	中阿含經卷第七(加提婆)	<b>梨子謂有比丘知六處</b> 如眞知六處習知六處滅知六處滅道如眞	黄蘗染、楮紙打紙、 填料わずか、墨界

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
027	A1-27	奈良朝時代 不知題経之断簡	摩訶般若波羅蜜經卷第一 (鳩摩羅什)	<b>至無意識界亦無無明亦無無明盡乃至亦無老死亦無老死盡無苦集滅道亦無智亦無得亦無須陀洹無須陀</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
028	A1-28	奈良朝時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百六十七 (玄奘)	<b>善女人等教一有情</b> 令於無上正等菩提得不退轉復以般若波羅蜜多無量法門巧妙文義爲其廣説宣示 <b>開演顯了解</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
029	A1-29	奈良朝時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百八十(玄奘)	<b>不能及故爾時</b> 舍利子白佛言世尊若聲聞乘預流一來不還阿羅漢所有智慧若獨覺乘所有智慧若菩薩摩訶薩所有智慧若諸如來應正等覺所有智慧如是一切皆無差別不相違 <b>背無生無滅自性皆</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料あり、非纖維細胞、墨界
030	A1-30	奈良朝時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第三十三 (三藏實叉難陀)	<b>周遍法界</b> 阿僧祇寶光明一一光明現一切光復有阿僧祇 <b>寶光明</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、朱訓点
031	A1-31	奈良朝時代 不知題経之断簡	成唯識論述記卷第一(窺基)	<b>實自心論緣</b> 此執爲實有外境述曰由患夢力不了眞虛遂執所見以爲實有 <b>此喻論上諸有情類</b>	黄蘗染、楮紙、非纖維細胞、墨界、朱点
032	A1-32	奈良朝時代 不知題経之断簡	四分律刪繁補闕行事鈔卷上通辨羯磨篇第五	<b>二界錯涉</b> 重結交互通唱遙結之類並不成就餘非例知八者白四如受戒法等一者人非受者遮難界中不集僧數有缺人雖五百一人人中五十餘法簡之不中通非正數二者法非受前進止八種調理及論正受執文無差等三者事非界相不明衣鉢非己之類餘非例前餘之正法乃至心念當法自成不相通練別衆一法多或通之廣張非相如義鈔也次釋羯磨正文令知綱要識解通塞若不具明見增減一字謂爲法非然其非相唯在一字然須知處所不得雷同 <b>或依文通辨</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 雁皮混抄カ、填料多い、 非纖維細胞、墨界
033	A1-33	奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説演道俗業經(聖堅)	<b>合者必敬福自追貪</b> 慕身地不覺惱恨口嗟沒過入泥黎門其身緣食四大隆盛神奇其中假號爲名羸弱猶化危脆不固不解非常倚世之：榮心懷萬憂謂亦長生存吾我不達悉空三界尚虛況人物乎汲汲迭惑貪嫉妬妬如斯行者奉 <b>養父母安和至心</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
034	A1-34	奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説無量清淨平等覺經卷第一(支婁迦讖)	<b>類親賢者</b> 氏梵經賢者多欲賢者王宮生賢者告來賢者氏黑山賢者經刹利賢者博聞賢者其女弟子名曰大欽姓比丘尼幻者比丘尼 <b>蓮華色比丘尼</b>	黄蘗染、楮紙、雁皮の混抄カ、 填料なし、墨界
035	A1-35	奈良朝時代 不知題経之断簡	大寶積經卷第四十六 (玄奘)	<b>我觀世間一切衆生</b> 所有福聚無量無邊如是乃至一切我觀世間一切衆生所有福聚無量無邊如是乃至一切有學無學所有福聚一切獨覺所有福聚轉復無量不可思議如上所有諸福聚等假使皆悉內置衆生一毛孔中如是衆生一一毛孔皆有如上福德之聚無量無邊不可思議如是 <b>假使</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料わずか、非纖維細胞、墨界
036	A1-36	奈良朝時代 不知題経之断簡	增壹阿含經卷第三(加提婆)	<b>不違禁法</b> 所謂軍頭婆漢比丘是降伏外道履行正法所謂實頭盧比丘是瞻視疾病供給醫藥所謂 <b>識比丘是四事</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、非纖維細胞、墨界
037	A1-37	奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説無量清淨平等覺經卷第一(支婁迦讖)	<b>我不我不作佛十</b> 我作佛時我國中人民有愛欲者我不作佛十一我作佛時我國中人民住止盡般泥洹不爾者我不作佛十二我作佛時我國諸弟子令八方上下各千億佛國中諸天人人民蠕動之類作緣一覺大弟子皆 <b>禪一心</b>	黄蘗染、楮紙打紙、 填料なし、墨界
038	A1-38	● 奈良朝時代 不知題経之断簡 茶毘紙	不空羼索神呪心經後序 (玄奘)	<b>母魯母耶母耶悶遮悶遮洛叉洛叉</b> 稽首能令我及一切有情解脫一切怖畏解脫一切厭蠱解脫一切災橫解脫一切疾病解脫一切邪魅魍魎解脫一切怨家殺縛恐 <b>喝捶</b>	マユミと楮の混抄、 填料多い、板目あり、 朱点、墨界
039	A1-39	奈良朝時代 光明皇后願経之断簡	得無垢女經(般若流支)	<b>一切人民聞法即解文殊師利</b> 童子曰我心安住觀察如色如是若入舍婆提城門戶窓壁器莊嚴具樹葉花果袈裟等中空無相無願等聲出不生聲亦出生聲出無我聲除惡菩薩曰我心安住 <b>觀察如色如是若入舍婆提城若彼衆生有惡業行應受報者彼見法故現</b>	黄蘗染、楮紙、填料 あり、墨界

「大日本古写経」リスト

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
040	A1-40	光明皇后願経	中阿含経卷第三(伽提婆)	心與慈俱遍滿一方成就遊如是二三四方四維上下普周一切心與慈俱無結無怨無恚無諍極廣甚大無量善修遍滿	黄蘗染、苧麻と雁皮の混抄か、墨界
041	A1-41	弘仁時代 不知題経之断簡	阿毘達磨順正理論卷第七(衆賢, 玄奘)	香菱花傍布而住正現前事見即分明非正現前見便不了於觀箭等曲直相時二眼中間置箭等者俱望二眼非正現前更相眩曜見不詳審設當一眼置箭等時	黄蘗染、楮紙、雁皮の混抄、填料わずか、墨界
042	A1-42	弘仁時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百四十四(玄奘)	若我清淨若一切陀羅尼門清淨若一切智智清淨無二無二分無別無斷故一切菩薩摩訶薩行清淨故一切三摩地門清淨	黄蘗染、楮紙、填料多い、非纖維細胞、墨界
043	A1-43	弘仁時代 不知題経之断簡	佛說羅摩伽經卷上(聖堅)	一切諸佛名號顯現清淨法輪之相復有師子如意珠王以音聲海普演諸佛本願海門一切法界寶王摩尼法相光明以為莊嚴時祇陀林上虛空中	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
044	A1-44	弘仁時代 不知題経之断簡	大光度經卷第一南吳月支國居士支謙譯	何所為明度何以明諸法無所從得師云不從内色外色内外痛想行見惠是為無所從得也是故謂之明度無極如是觀省察思惟不驚不但不移不疲如是菩薩為不中休明	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
045	A1-45	弘仁時代 不知題経之断簡	成唯識論卷第三(護法, 玄奘)	阿毘達磨契經中說無始時來界一切法等依由此有諸趣及涅槃證得此第八識自性微細故以作用而顯示之頃中初半顯第八識為因緣用後半顯與流轉還滅作依持用界是因義即種子識無始時來展轉相續親生諸法故名為因依是緣義即執持識無始	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
046	A1-46	弘仁時代 不知題経之断簡	大寶積經卷第四十三(玄奘)	天子之所參觀請法斷疑而是菩薩不住其所四者現大宮殿為於菩薩之所受用舍利子是為菩薩摩訶薩處在天上獲四種廣勝處法舍利子如是菩薩摩訶薩行尸羅波羅蜜多時若在天上若生人中復得無量無邊百千萬億諸妙法門皆為滿足	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
047	A1-47	弘仁時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第一(鳩摩羅什)	漸見無數佛或有人禮拜或復但合掌乃至舉一手或復小低頭以此供養像漸見無量佛自成無上道廣度無數衆入無餘涅槃如新盡火滅若人散亂心入於塔廟中	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
048	A1-48	弘仁時代 不知題経之断簡 天地金銀箔	理趣釋重釋記	持此最勝教王者一切諸魔不能壞得佛菩薩最勝位於諸悉地當不久一切如來	雁皮紙、填料あり、上下欄外に金銀箔散、金界
049	B2-1	藤原時代 不知題経之断簡	藥師琉璃光如來本願功德經(玄奘)	莊嚴其身令一切有情如我無異第二大願願我來世得菩提時身如琉璃内外明徹	紺紙金字、楮紙打紙、銀界
050	B2-2	藤原時代 不知題経之断簡 (後白河法皇)		經典にあらず	楮紙打紙、填料多い、繊維に方向性(横)あり、非纖維細胞、墨界
051	B2-3	弘仁時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百七十一(玄奘)	九次第定十遍處清淨故八聖道支清淨何以故若一切智智清淨若八勝處九次第定十遍處清淨若八聖道支清淨無二無二分無別無斷故善現一切智智清淨故四念住清淨四念住清淨故八聖道支清淨何以故若一切智智清淨若四念住清淨	黄蘗染、楮紙、雁皮の混抄か、填料あり、非纖維細胞、墨界
052	B2-4	弘仁時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百二十三(玄奘)	清淨故一切智智清淨何以故若集聖諦清淨若淨戒乃至般若波羅蜜多清淨若一切智智清淨無二無二分無別無斷故善現集聖諦清淨故内空清淨内空清淨故一切智智清淨何以故	黄蘗染、楮紙、填料あり(大きい粒もみられる)、非纖維細胞、表面に何か塗布しているか、墨界
053	B2-5	弘仁時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三十三(玄奘)	若不可得増語是菩薩摩訶薩復次善現汝觀何義言即大慈増語非菩薩摩訶薩即大悲大喜大捨増語非菩薩摩訶薩耶	黄蘗染、楮紙、填料あり(大きい粒もみられる)、非纖維細胞、墨界

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
054	B2-6	弘仁時代 大般若経之断簡 天長四年跋あるもの	大般若波羅蜜多經卷第三百七十七(玄奘)	若不寂靜若遠離若不遠離亦不取著受想行識若常若無常若樂若苦若我若無我若淨若不淨若寂靜若不寂靜若遠離若不遠離終不：取著眼處若常若無常若樂若苦若我若無我若淨若不淨	黄蘗染、楮紙打紙、填料多い、非纖維細胞、墨界
055	B2-7	弘仁時代 弘法大師経切	因明入正理論疏卷下(窺基)	次簡因蓋後學果顯智此初文也言相次簡因蓋後學果顯智此初文也言相有三釋前衆相離重言失故指如前由彼為因釋前藉義由即因由藉待之義於所比義此即釋前而觀於義前談照境之能日之為觀後約籌慮之用號之曰比言於所彰結比故也論有正智生述曰此簡因蓋	黄蘗染、楮紙、填料多い、非纖維細胞、墨界
056	B2-8	藤原時代 不知題経之断簡	四分律刪繁補闕行事鈔卷下一(道宣)	行處衣・障壁蟲衣・單敷衣覆僧臥 具可床四邊而下垂四角各一尺上安坐具護腓護踵護頭衣・拭身巾・拭手巾・拭面巾・針	楮紙、填料多い、非纖維細胞、朱点、紙背文書あり
057	B2-9	藤原時代 不知題経之断簡	大般涅槃經卷第三十一(宋代沙門惠嚴等依泥洹經加之)	智者云何説言是常若色是常不應壞滅生諸苦惱今見是色散滅破壞是故當知色是無常乃至識亦如是	黄蘗染、楮紙、填料あり、繊維に方向性あり、墨界、朱点
058	B2-10	藤原時代 不知題経之断簡	大毘盧遮那成佛經疏卷第十一	諸大菩薩隨心所欲利衆生事如幻幻水月而應萬類皆得成也此即如來如幻三昧之句若能如是作者無始生以來惡業	黄蘗染、楮紙、填料あり、繊維に方向性あり、墨界、朱点
059	B2-11	藤原時代 不知題経之断簡	佛說仁王般若波羅蜜經卷下(鳩摩羅什)	為七難也大王是般若波羅蜜是諸佛菩薩一切衆生心識之神本也一切衆生心識之神本也一切國王之父母也亦名神符亦名辟鬼珠	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、朱点
060	B2-12	藤原時代 不知題経之断簡	起世因本經卷第九(達摩笈多)	此大地上出生地肥凝然而住譬如有人熟煎乳訖其上便有薄膜而住或復水上有薄膜住如是如是諸比丘或復於三摩耶時此大地上生於地肥凝然而住譬如攪酪成就生酥有於如是形色相貌其味有如無蠟之蜜爾時彼處諸衆生輩	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
061	B2-13	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五十七(玄奘)、五十八、四百一十八、四百一十九、四百九十三、四百九十四のいずれか	有虛空無所有故當知大乘亦無所有大乘無所有故當知無數亦無所有無數無所有故當知無量亦無所有無量無所有故當知無邊亦無所有無邊無所有故當知一切法亦無所有由如是義	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
062	B2-14	藤原時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第二十一(佛駄跋陀羅)	令他修習梵行無有是處菩薩不樂梵行令他樂修梵行無有是處菩薩不住梵行令他安住梵行無有是處菩薩不究竟梵行令他究竟梵行	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
063	B2-15	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百六十二(玄奘)	衆事王事賊事軍事戰事城邑聚落象馬車乘衣服飲食臥具華香男女好醜園林池沼山海等事不樂	黄蘗染、雁皮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
064	B2-16	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百六十七(玄奘)	圓滿諸餘功德復次善現諸菩薩摩訶薩行深般若波羅蜜多時能以離相無漏之心而修靜慮是菩薩摩訶薩除諸佛定於諸餘定皆能圓滿是菩薩摩訶薩離	黄蘗染、楮紙、填料あり、繊維に方向性(縦)あり、墨界
065	B2-17	藤原時代 不知題経之断簡	經律異相卷第四十五女庶人部下(寶唱等)	入便閉門前牽沙門沙門不從婦大患呼婢來鑿作火坑深一丈使四婢急捉身不得動臨火坑上沙門言且止我當計校沙門自念我入火中為一死耳此持戒	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、藍纖維が内部にみられる、墨界
066	B2-18	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百九十九(玄奘)	著無著不行眼過去未來現在著無著不行耳鼻舌身意過去未來現在著無著不行色過去未來現在著無著不行聲香味觸法過去未來現在著無著不行眼識過去未來現在著無著不行耳鼻舌身意識過去未來現在著無著不行色過	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、繊維に方向性あり、墨界、朱点

「大日本古写経」リスト

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
067	B2-19	藤原時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第六十(實叉難陀)	<b>教化調</b> 伏衆生法方便海音聲雲出説一切隨時隨善根隨願力普令衆生證得智慧方便海音聲雲到佛所已頂禮佛足即於下方化作現一切如來宮殿形像衆寶莊嚴樓閣及一切寶蓮華藏師子之座著普現道場影摩尼寶 <b>冠與其眷屬</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
068	B2-20	藤原時代 不知題経之断簡	大寶積經卷第十二(菩提流志)	<b>離愚冥哉開化</b> 其心立乎大乘故色像緣哉其心等住逮得如來像身故緣音響哉心以住在如來言聲故緣衆香哉心以存立如來戒動故緣衆味哉心以住存如來道味故緣大人相哉心行以住得莊嚴故緣細滑哉心以存立得於如來手足柔軟故緣經法哉心以住在逮得如來 <b>無所生意故</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、纖維に方向性あり、墨界
069	B2-21	藤原時代 不知題経之断簡	瑜伽師地論卷第二十五(玄奘)	<b>然後方食如</b> 是名爲先止後食云何名爲但持三衣謂但 <b>三衣而自支持</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
070	B2-22	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第三(鳩摩羅什)	<b>隨意隨意所作</b> 若入是城快得安隱若能前至寶所亦可得去是時疲極之衆心大歡喜歡未曾有我等今者免斯惡道快得安隱於是衆人前入化 <b>城生已度想</b>	紺紙金字、楮紙、填料なし、銀界
071	B2-23	藤原時代 不知題経之断簡	六度集經卷第二吳康居國沙門康僧會譯	<b>太子亦</b> 觀其來兩兒觀之中心但懼兄弟俱曰吾父尚施而斯子來財盡無副必以吾兄弟惠與之攜手俱逃母故掘蔭其培容人二兒入中以 <b>柴覆自上</b>	紺紙金字、楮紙、填料なし、銀界
072	B2-24	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第九十五(玄奘)	<b>於預流</b> 求不應於一來不還阿羅漢求不應離預流求 <b>不應離</b>	紺紙金字、楮紙、銀界
073	B2-25	藤原時代 不知題経之断簡	聖迦柅忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經卷中(不空)	<b>供養於銀器</b> 中盛酥取酥法如下當明念誦乃至三相現隨上中下皆得聞持不忘又法欲得雄黃成就延壽者持誦人飲乳食大麥誦眞言十萬遍對摩醯首羅像前取雄黃盛於 <b>熟銅器中</b>	紺紙金字、楮紙、銀界
074	B2-26	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第七(鳩摩羅什)	<b>受持者應</b> 作此念皆是普賢威神之力若有受持讀誦正憶念解其義趣如説修行當知是人行普賢行於無量無邊諸佛所深種善根爲諸如來 <b>手摩</b>	紺紙金字、楮紙、銀界
075	B2-27	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經玄賛卷第六(藕基)	<b>疾或復致死</b> 若自有病無人救療設服良藥而復增劇若他叛逆抄劫竊盜如是等罪橫羅其殃如斯罪人永不見佛衆聖之王説法教化如斯罪人常生難處狂瞽心亂永不聞法於無數劫如恒河沙生輒聾啞諸根不具難合有八難故無善也經常處地獄至獲 <b>罪如是賛曰</b>	紺紙金字、楮紙打紙、填料わずか、銀界
076	B2-28	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百六十四(玄奘)	<b>菩提故</b> 由此般若波羅蜜多亦畢竟離不應修遣亦復不應有所引發無上菩提亦畢竟離云 <b>何可説諸菩薩</b>	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界
077	B2-29	藤原時代 不知題経之断簡		迦哩迦權(以下、略)	楮紙、填料多い、非纖維細胞、墨界、朱点
078	B2-30	藤原時代 不知題経之断簡 中尊寺経にあらず	佛説普門品經(竺法護)	<b>速得斯定</b> 處於衆會蠲除一切姪怒癡病有三昧名莫能當假使菩薩速得斯定照明一切八方 <b>上下諸佛</b>	紺紙金銀字、楮紙、填料あり、銀界
079	B2-31	弘仁時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百五十二(玄奘)	<b>所生諸受</b> 清淨故無際空清淨何以故若一切智智清淨若法界乃至意觸爲緣所生諸受清淨若無際空清淨無二無二分無別無斷故善現一切智智清淨故地界清淨地界清淨故無際空清淨(以下、略)	黄蘗染、楮紙、黄蘗染、填料あり、非纖維細胞、墨界
080	B2-32	弘仁時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百八十九(玄奘)	<b>一切相智</b> 清淨即作者清淨何以故是作者清淨與道相智一切相智清淨無二無二分無別無斷故受者清淨即一切智清淨一切智清淨即受者清淨何以故是受者清淨與一切智清淨無二無二分無(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
081	B2-33	藤原時代 法華経之断簡 (埋納巻のもの)	妙法蓮華經卷第六(鳩摩羅什)	<b>之智慧如來智慧自然智慧</b> 如來是一切衆生之 <b>大施主汝等亦應</b> 隨學如來之法勿生慳恪於未來世若有善男子善女人信如來智者當爲演説此 <b>法華經</b> 使得聞知爲令其人	楮紙、填料わずか
082	B2-34	● 藤原時代 法華経之断簡	妙法蓮華經卷第五(鳩摩羅什)	<b>如意珠瓔珞</b> 遍於九方衆寶香爐燒無價香自然周至供養大會一一佛上有諸菩薩執持幡蓋次第 <b>而上至于梵天</b>	藍紙(雁皮紙に藍染めの再生纖維を漉きかけたもの。再生纖維に濃淡と墨痕あり)、填料あり、金銀切箔散、銀界
083	B2-35	● 戸隠切 聖徳太子	妙法蓮華經卷第二(鳩摩羅什)	<b>軟意慙</b> 一切恭敬諸佛如是之人乃可爲説復有佛子於大衆中以清淨心種種因緣譬	楮紙・雁皮紙の再生纖維を用いた漉き返しの料紙、填料あり。墨痕が纖維の中に入り込んでいる。経文は、一字ごとに雲母摺りの宝塔中に書写。
084	B2-36	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第七(鳩摩羅什)	<b>得度者現</b> 辟支佛形而爲説法應以菩薩形得度者現菩薩形而爲説法應以佛形得度者即現 <b>佛形而爲説法</b>	黄蘗染、楮紙、填料わずか。紙が赤っぽいのは再生纖維が多く含まれるためか。墨界
085	B2-37	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百九十二(玄奘)	<b>般若波羅蜜多</b> 善現彌勒菩薩摩訶薩得阿耨多羅三藐三菩提時當以苦聖諦非常非無常非樂非苦 <b>非我非無我非淨</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
086	B2-38	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第一(鳩摩羅什)	<b>諸王子</b> 供養無量百千萬億佛已皆成佛道其最後成佛者名曰燃燈八百弟子中有一人號曰求名貪著利養雖復讀誦衆經而不利多所忘失故號求名是人亦以種諸善根因緣故得值無量百千萬億諸佛供(以下、略)	黄蘗染、雁皮紙、填料あり、墨界
087	B2-39	藤原時代 不知題経之断簡	佛説阿彌陀經(玄奘)	<b>何故名爲極樂</b> 其國衆生無有衆苦但受諸樂故名極樂又舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四寶周匝圍繞是故彼國名曰極樂又舍利弗極樂	黄蘗染、楮紙、填料多い、金界
088	B2-40	藤原時代 不知題経之断簡	佛説觀普賢菩薩行法經(曇無蜜多)	<b>故專心</b> 修習心心相次不離大乘一日至三七日得見普賢有重障者七七日盡然後得見復有重者一生得見復有重者二生得見復有重者 <b>三生得</b>	黄蘗染、楮と雁皮の混抄、填料あり、銀界、墨仮名・返り点あり
089	B2-41	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百六十五(玄奘)	<b>若極喜地</b> 乃至法雲地若一切陀羅尼門三摩地門若五眼六神通若如來十力乃至十八佛不共法若三十二大士相八十隨好若無忘失法恒住捨性	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
090	B2-42	藤原時代 不知題経之断簡		經典にあらず	楮紙、填料あり、本文両面書、無界、朱点
091	C3-1	藤原時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三十八(玄奘)	<b>觸界身</b> 識界及身觸身觸爲緣所觸界身識界及身觸身觸爲緣所生諸受空不空若行身界乃至身觸爲緣所生諸受空不空相非行般若波羅蜜多若行身界觸界身識界及身觸身觸爲緣所生諸受無相有相若行身界乃至身觸爲緣所生諸受無相有相相非行 <b>般若波羅蜜多</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非纖維細胞、墨界

「大日本古写経」リスト

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
092	C3-2	藤原時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百八十六あるいは一百九十三(玄奘)	<b>法界乃至</b> 意觸爲縁所生諸受清淨無二無二分無別無斷故善現 儒童清淨即地界清淨地界清淨即儒童清淨何以故。是儒童清 淨與地界清淨無二無二分無別無斷故儒童清淨即水火風空識 界清淨水火風空識界清淨即 <b>儒童清淨</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
093	C3-3	藤原時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三百二十三(玄奘)	<b>善女人等</b> 遠離般若波羅蜜多方便善巧於所修行布施淨戒安 忍精進靜慮般若波羅蜜多皆取相故於所安住内空外空内外空 空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空空空無 <b>變異空本 性空</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
094	C3-4	藤原時代 大般若経之断簡	阿毘達磨大毘婆沙論卷第九十七(玄奘)	<b>壞者顯示外分</b> 無常復次變者顯示有情數無常壞者顯示非情 數無常如說舍壞倉庫等壞云何無漏見乃至 <b>廣説</b>	黄蘗染、楮紙、填料多い、墨界
095	C3-5	藤原時代 大方便佛報恩經卷第四断簡	大方便佛報恩經卷第四	<b>作天伎樂放</b> 大光明讚言善哉如來所説法未曾有也一切大衆聞 佛説法頭面作禮歡喜而去 大方便佛報恩經卷第四	黄蘗染、楮紙、填料あり、朱点
096	C3-6	藤原時代 仏名経之断簡	未來星宿劫千佛名經	<b>南無寶羅網佛</b> 南無極上中王佛 南無一切持覺刹佛 南無星王 佛 南無善攝身佛 <b>南無善住王佛</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
097	C3-7	藤原時代 散蓮華			楮紙、填料多い、非纖維細胞
098	C3-8	鎌倉時代 不知題経之断簡	阿毘達磨大毘婆沙論卷第九十七(五百大阿羅漢, 玄奘)	<b>情數無常如說舍壞倉庫等壞云何無漏見乃至廣説</b> 問何故作此 論答前雖總説見智慧三而未別説云何無漏見云何無漏智前論 是此所依根本彼未説者今應説之復次前雖已説世俗見智今 欲顯彼近對治法故作斯論云何無漏見答除盡無生智餘 <b>無漏慧</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
099	C3-9	鎌倉時代 不知題経之断簡	無量義經德行品第一・蕭齊天竺三藏曇摩伽陀耶舍譯	<b>無有衆魔群道</b> 得入不爲一切邪見生死之所壞敗是故善男子。 菩薩摩訶薩若欲疾成無上菩提應當修學如是甚深無上大乗無 量義經爾時大莊嚴菩薩復白佛言世尊世尊説法不可思議衆生 根性亦不可思議法門解脫亦不可思議	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
100	C3-10	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三百二十八(玄奘)	<b>世尊云何</b> 真如亦名甚深云何法界法性不虛妄性不變異性平等 性離生性法定住實際虚空界不思議界亦名甚深世尊云何四 念住亦名甚深云何四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支 亦名甚深世尊云何苦聖諦亦名甚深	黄蘗染、填料あり、楮紙打紙
101	C3-11	鎌倉時代 不知題経之断簡		一切如來四攝智金剛鉤菩薩等盡虚空遍法界一切成辨菩薩摩 訶薩(以下、略)	楮紙打紙、填料わずか、金界
102	C3-12	鎌倉時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第五安樂行品第十四(鳩摩羅什)	<b>彌勒爲</b> 首合掌白佛彌勒爲首合掌白佛言世尊唯願説之我等當 信受佛語如是三白已復言唯願説之我等當信受佛語爾時世尊 知諸菩薩三請不止而告之言汝等諦聽如來祕密神通之力一切 世間天人及阿修羅皆謂今釋迦牟尼佛出釋 <b>氏宮</b>	雁皮打紙、填料あり、金界
103	C3-13	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三百二十八(玄奘)	<b>世尊云何</b> 苦聖諦亦名甚深云何集滅道聖諦亦名甚深世尊云何 四靜慮亦名甚深云何四無量四無色定亦名甚深世尊云何八解 脫亦名甚深云何 <b>八勝處</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
104	C3-14	鎌倉時代 不知題経之断簡	大乘大集地藏十輪經卷第七(玄奘)	<b>内身不著</b> 外身不著内外身不著過去身不著未來身不著現在身 名第一法能令菩薩摩訶薩等獲得無罪正路法忍又善男子若諸 菩薩摩訶薩等不著内受不著外受不著内外受不著過去受不著 未來受不著現在受名第二 <b>法能令菩薩</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界、朱点
105	C3-15	● 笠置切 (万里小路宣房)	妙法蓮華經卷第七(鳩摩羅什)	<b>衆生應以佛身得度者觀世音菩薩</b> 即現佛身而爲説法應以辟支 佛身得度者即現辟支佛身而爲説法應以聲聞身得度者即現聲 聞身而爲説法應以梵王身得度者 <b>即現梵</b>	楮紙打紙、填料わずか。繊維の下に墨痕がみえる。金界
106	C3-16	● 笠置切 (万里小路宣房)	佛説觀普賢菩薩行法經(曇無蜜多)	<b>大乘力故空中有聲而讚歎言</b> 善哉善哉善男子汝行大乘功德因 縁能見諸佛今雖得見諸佛世尊而不能見釋迦牟尼佛分身諸 佛及多寶佛塔聞空中聲已復勸誦習	楮紙打紙、填料わずか。繊維の下に墨痕がみえる。金界

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
107	C3-17	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第九十九(玄奘)	<b>亦無邊</b> 所以者何以預流等若中若邊皆不可得故説無邊彼無邊 故菩薩摩訶薩所行般若波羅蜜多亦説無邊橋尸迦預流向預流 果無邊故 <b>菩薩摩訶薩</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、簀目はっきり、墨界、朱点、文字の墨が一部流れている
108	C3-18	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百一十七	大般若波羅蜜多經卷第一百一十七 初分校量功德品第三十之十五 三藏法師玄奘奉 詔譯 世尊云何以地界無二爲方便無生爲方便無所得爲方便迴向一 切智智安住眞如法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法 定法住實際虚空界不思議界慶喜地世界界 <b>性空</b>	黄蘗染、楮紙、填料多い、非纖維細胞、墨界
109	C3-19	鎌倉時代 定家卿筆		(記録の断簡)	楮紙打紙、填料あり、墨界
110	C3-20	徳川時代 法華経之断簡 (有栖川幸仁親王)	五教章通路記巻第五十一(凝然)	<b>法爲阿耨多羅三藐三菩提</b> 此諸衆生于今有住聲聞地者我常教 化阿耨多羅三藐三菩提是諸人等應以是法漸入佛道所以者何 如來智慧難信難解爾時 <b>所化無量</b>	雁皮打紙、填料あり、經文は一字ごと金の蓮華の上に配置する、金の裝飾を含む料紙全体を磨いた跡あり銀界カ
111	C3-21	足利時代 不知題経之断簡	佛説阿彌陀經、あるいは稱讚淨土佛攝受經の一部	土成就如是功德莊嚴(以上、九文字のみ)	紺紙金字、楮紙打紙
112	C3-22	鎌倉時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第五(鳩摩羅什)	<b>王子大臣官長不親近</b> 諸外道梵志尼犍子等及造世俗文筆讚詠 外書及路伽耶陀逆路伽耶陀者亦不親近諸有 <b>兇戲相投相撲及</b>	楮紙打紙、填料わずか、天地銀箔散、銀界、文中に読点、返点あり
113	C3-23	● 鎌倉時代 不知題経之断簡 (法隆寺薄墨経)	大方廣佛華嚴經卷第十(佛駄跋陀羅)	<b>隨所請衆生</b> 皆悉度脱興隆三寶永使不絶一切所爲善根境界諸 行方便皆悉不虛善哉佛子當爲我等演説此法願樂欲聞如諸菩 薩所修功德滅除癡闇降伏衆魔制諸外道離於塵垢 <b>具足成就</b>	楮紙の漉き返し、填料あり、繊維の下に墨痕、墨界
114	C3-24	● 鎌倉時代 不知題経之断簡	瑜伽師地論卷第八十五(玄奘)	<b>當知過去未來諸行</b> 尚定無常何況現在何等爲三謂先無而有故 先有而無故起盡相應故若未來行先所未有定非有者是即應非 先無而有如是應非無常決定由彼先時施設非有非有爲先後 <b>時 方</b>	楮紙の漉き返し、填料あり、簀目はっきり、繊維の下に墨痕が入り込んでいる、墨界
115	C3-25	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四十八(玄奘)	<b>爲方便智</b> 不知世間智不知出世間非不知世間出世間法以無所 得而爲方便與一切有情同共 <b>迴向阿耨</b>	紺紙金字、楮紙打紙、銀界
116	C3-26	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四十(曇無讖)	<b>出家受戒</b> 佛言善來比丘即時斷除三界煩惱得阿羅漢果爾時復 有一婆羅門名曰弘廣復作是言曇曇知我今所念不佛言善男子 涅槃是常有爲 <b>無</b>	紺紙金字、楮紙打紙、填料あり、銀界
117	C3-27	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五十九(玄奘)	<b>得何況空中有未來法界乃至意觸</b> 爲縁所生諸受可得善現空中 現在法界意識界及意觸意觸爲縁所生諸受不可得何以故現在 法界乃至意觸爲縁所生諸受 <b>即是空</b>	紺紙金字
118	C3-28	鎌倉時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第二(鳩摩羅什)	<b>根力覺道</b> 禪定解根力覺道禪定解脫三昧等而自娛樂使得無量 安隱快樂舍利若有衆生内有智性從佛世尊聞法信受慇懃精 進欲速出三界自求涅槃是名 <b>聲聞乘</b>	紺紙金字
119	C3-29	鎌倉時代 不知題経之断簡		附庸云々(古辞書の断簡とみられる)	楮紙打紙、填料わずか、金界、校合奥書「一校了」あり

## IV. 紀要 1

## 「大日本古写経」リスト


No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
120	C3-30	鎌倉時代 不知題経之断簡	四座講式 (高辨撰)	<b>況遺跡敬重人得如來愛子之名乎況戀慕渴仰輩受無上菩提乎仍唱伽陀可行禮拜矣見聞供養聖遺跡 所得功德不可量於有爲中終不盡 要滅煩惱離衆苦南無人天有情所歸依處大聖化儀處處遺跡</b>	楮紙、填料あり、非纖維細胞、銀界カ
121	C3-31	鎌倉時代 不知題経之断簡	不獨記云々		楮紙、填料多い、非纖維細胞、金界、仮名点、返点
122	C3-32	鎌倉時代 不知題経之断簡	金剛頂經金剛界 大道場毘盧遮那 如來自受用身内 證智眷屬法身異 名佛最上乘祕密 三摩地禮懺文	<b>一切諸佛南謨一切如來智慧門金剛法等盡虚空遍法界同一體性金剛界生身一切諸佛南謨一切</b>	黄蘗染、楮紙 打紙、雁皮混抄カ、填料あり、金界、墨 仮名点、朱読点
123	C3-33	鎌倉時代 不知題経之断簡	放光般若經卷第十二 (無羅叉)	<b>須菩提如亦不來亦不去以是故須菩提從佛生佛之如者則爲一切諸法之如如諸法如則佛之如如者亦復非如</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
124	C3-34	鎌倉時代 不知題経之断簡	無畏三藏禪要 (海仁齋)	<b>二乘斷三寶故六者未發菩提心者亦不應說如是法二乘斷三寶種故六者未發菩提心者亦不應說如是法令彼發於二乘之心違本願故七者對</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界、返点、朱読点
125	C3-35	鎌倉時代 不知題経之断簡 (後白河法皇)	宗性筆聖教断簡	之輩以德望号可成之小僧大願永不可若是末世之宿願歟将又一旦之發心歟(以下、略)	楮紙、填料あり、非纖維細胞
126	C3-36	鎌倉時代 法華経之断簡	妙法蓮華経卷第五 (鳩摩羅什)	<b>人書復能起塔及造僧坊供養讚歎聲聞衆僧亦以百千萬億讚歎之法讚歎菩薩功德又爲他人種種因縁隨義解說此法華經</b>	楮紙打紙、填料あり、金銀箔散、金界、朱点
127	C3-37	鎌倉時代 法華経之断簡	妙法蓮華経見寶塔品第十一	妙法蓮華経見寶塔品第十一 爾時佛前有七寶塔高五百由旬縱廣二百五十由旬從地踊出住在	楮紙打紙、填料あり、天地金銀箔散、金界
128	C3-38	● 鎌倉時代 法華経之断簡	大毘盧遮那成佛神變加持経卷第七 (善無畏)	<b>修行人速得成就</b> 復次本尊之所住曼荼羅位之儀式 如彼形色壇亦然 依此瑜伽疾成就 當知悉地有三種 寂災增益降伏心 分別事業凡四分 隨其物類所當用 純素黄赤深玄色 圓方三角蓮華壇 北面勝方住蓮	楮紙打紙、填料あり、銀箔散、纖維間に墨痕、金界
129	C3-39	鎌倉時代 法華経之断簡	成唯識論卷第十 (護法、玄奘)	邊徳於一切法最爲勝故三勝流眞如謂此眞如所流教法於餘教法極爲勝故四 <b>無攝受眞</b>	楮紙打紙、填料多い、銀揉箔散、朱訓点、銀界
130	C3-40	鎌倉時代 法華経之断簡	妙法蓮華経卷第四 (鳩摩羅什)	<b>樹下皆有寶師子</b> 座高五由旬種種諸寶以爲莊校亦無大海江河及目眞隣陀山摩訶目眞隣陀山鐵圍山大鐵圍山須彌山等諸山王通爲一佛國土寶地平正寶交露幔遍覆其上懸諸幡蓋燒大寶香	楮紙打紙、填料あり、銀箔、銀界
131	C3-41	鎌倉時代 法華経之断簡 口の五色経	大毘盧遮那成佛神變加持経 (善無畏)	<b>諸衆生</b> 同得一切種智以來常當修集福德智慧不造餘業願我等到第一安樂所求悉地離諸障礙一切圓滿故復更思惟令我速當具足若内若外種清淨妙寶而自莊嚴相續無間皆普流出以是因縁故能滿一切衆生 <b>所有希願</b>	楮紙、填料わずか、料紙中に50μmの茶の粒あり、銀箔散、金界
132	C3-42	鎌倉時代 法華経之断簡	妙法蓮華経卷第七 (鳩摩羅什)	<b>方便</b> 之力其事云何佛告無盡意菩薩善男子若有國土衆生應以佛身得度者觀世音菩薩即現佛身而爲說法應以辟支佛身得度者即 <b>現辟支佛身</b>	楮紙打紙、填料わずか、天地欄外金銀箔散、金界
133	C3-43	鎌倉時代 血書経	大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴経卷第一(般刺蜜帝)	<b>日普佛世界六種震動如是十方微塵</b> 國土一時開現佛之威神令諸世界合成一界其世界中所有一切諸大菩薩皆住本國合掌承聽佛告阿難一切衆生從無始來種種顛倒業種自然如惡叉聚諸修行人不(以下、略)	雁皮紙、填料あり、非纖維細胞、朱書経


No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
134	D4-1	藤原時代 大般若経之断簡 稻生四宮口	大般若経波羅蜜多經卷第四百 (玄奘)	<b>當知是人常見諸佛</b> 恒聞正法修諸梵行時薄伽梵說是經已無量菩薩摩訶薩衆慈氏菩薩而爲上首大迦葉波及舍利子阿難陀等諸大聲聞及餘天龍人非人等一切大衆聞佛所說皆大歡喜信受奉行大般若波羅蜜多經卷第四百 為現世安穩後生善處奉結縁也 藤原道成口友	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
135	D4-2	藤原時代 中尊寺経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百六十四 (玄奘)	<b>天帝尚往其所</b> 供養恭敬況餘天神苾芻當知是諸菩薩如是學時一切來及諸菩薩諸天龍等常隨守護由此因縁世間危厄身心憂苦皆不侵害所有疾病亦復不起苾芻當知是諸菩薩獲如是等現法勝利後世功德無量無邊時阿難陀竊作是念天帝釋爲自辯才讚說如是菩薩功德爲是如來威神加被時天帝釋承佛威神知阿難陀心之所念白言大徳非我辯才皆是如來威神加被爾時佛告阿難陀言。如是如是今天帝釋承佛威神能如是 <b>說慶喜當知</b>	紺紙金銀交書、楮紙、填料わずか、銀界
136	D4-3	藤原時代 中尊寺経之断簡	大乘悲分陀利經卷第三	大乘悲分陀利經四王子授記品第八 善男子爾時海濟婆羅門告第四王子支衆略說如曼如尸利所願無異世尊讚言善哉善哉善男子汝爲菩薩時當破無量阿僧祇衆生結使金剛之山而作佛事然後當成阿耨多羅三藐三菩提善男子是故字汝爲壞金剛慧明照尸利汝壞金剛慧明照於當來世過一恒河沙數阿僧祇	紺紙金銀交書、楮紙、填料わずか、銀界
137	D4-4	藤原時代 大般若経之断簡 小野道風	大般若波羅蜜多經卷第二百五十一 (玄奘)	<b>無二無二分無別無斷</b> 故一切智智清淨故香界鼻識界及無二無二分無別無斷故一切智智清淨故香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲縁所生諸受清淨香界乃至鼻觸爲縁所生諸受清淨故無爲空清淨何以故若一切智智清淨若香界乃至鼻觸爲縁所生諸受清淨若無爲空清淨無二無二分無別無斷故善現一切智智清淨故舌界清淨舌界清淨故無爲空清淨何以故若一切智智清淨若舌界清淨若無爲空清淨無二無二分無別無斷故一切智智清淨故 <b>味界舌識界</b>	楮紙打紙、填料あり、墨界
138	D4-5	奈良朝時代 不知題経之断簡	藥師琉璃光七佛本願功德経卷上 (義淨)	<b>乃至菩提</b> 第三大願願我來世得菩提時若有衆生更相凌慢共爲警隙若聞我名至心稱念由是力故名起慈心猶如父母乃至菩提第四大願願我來世得菩提時若有衆生貪欲瞋患癡癡若纏若出家在家男女七衆毀 <b>犯如來</b>	黄蘗染、楮紙、填料わずか
139	D4-6	奈良朝時代 不知題経之断簡	增壹阿含経卷第二十七 (曇摩難提)	<b>體中有何可貪</b> 三十六物皆悉不淨今此諸物爲從何生是時尊者多耆奢復作是念我今觀他形爲不如自觀身中此欲爲從何生爲從地種生耶水火風種生耶設從地種生地種堅強不可沮壞設從水種生水種極濡不可獲持設從火種生火種不可獲持設	黄蘗染、楮紙、填料わずか
140	D4-7	奈良朝時代 註楞嚴経之断簡 魚養	楞伽阿跋多羅寶経卷第一 (求那跋陀羅)	禪三摩提滅及如意足覺支及道品諸禪定無量諸陰身住來正受滅盡定三昧起心説心意及與識無我法有五自性所想及與現二見	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
141	D4-8	貞観時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百一十六 (玄奘)	<b>大乘亦爾</b> 非住非不住善現如一來者頻來生不遷者欲界生大菩薩自利生阿羅漢濁覺如來後有生非住非不住所以者何以一來者：頻來生乃至如來後有生自性無住無不住何以故一來者頻來生乃至如來後有生自性一來者頻來生乃至如來後有生自性空故大乘亦爾非住非不住善現如預流 <b>非住非不住</b>	黄蘗染、楮紙 打紙、填料あり、非纖維細胞
142	D4-9	弘仁時代 弘法大師		經典にあらず	楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界、朱点

## IV. 紀要 1

## 「大日本古写経」リスト


No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
143	D4-10	弘仁時代 不知題経之断簡	大智度論卷第九十一 (鳩摩羅什)	<b>菩薩摩訶</b> 薩道一切法亦是菩薩摩訶薩道須菩提於汝意云何頗有法菩薩所不學能得阿耨多羅三藐三菩提不須菩提無有法菩薩所不應學者何以故菩薩不學一切法不能得一切種智須菩提白佛言世尊若一切法空云何言菩薩學一切法將無世尊無戲論中作戲論耶所謂是此是彼是世間法是出世間法是有漏法は無漏法是有爲法は無爲法是凡夫人 <b>法</b> 是 <b>阿羅漢</b> 法	黄蘗染、楮紙、填料わずか、非纖維細胞、墨界
144	D4-11	● 弘仁時代 不知題経之断簡	稱讚淨土佛攝受經 (玄奘)	<b>亦有現在梵音如來宿王</b> 如來香光如來如紅蓮華勝徳如來示現一切義利如來如是等佛如苑伽沙住在上方自佛淨土各各示現廣長舌相遍覆三千大千世界周圍繞說誠諦言汝等有情皆應信受如是稱讚不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門 <b>又舍利子</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非纖維細胞、墨界 奈良時代の書写
145	D4-12	弘仁時代 不知題経之断簡	瑜伽師地論卷第六十八 (玄奘)	<b>修不放逸</b> 云何於毘奈耶勤學苾芻依生第三時中應不放逸謂有苾芻臨命終時其心猛利發起如是正加行心謂我今者應以緣佛緣法緣僧正命而死應以緣善善心而死彼遂發起如是如是善守護心正念現前以緣於佛法僧正念及緣諸善善心而死彼由緣佛緣法緣僧 <b>所有正念</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界、朱点
146	D4-13	弘仁時代 不知題経之断簡	藥師琉璃光如來本願功德經 (玄奘)	<b>或怪鳥來集</b> 或於住處百怪出現此人若以衆妙資具恭敬供養彼世尊藥師琉璃光如來者惡夢惡相諸不吉祥皆悉隱沒不能爲患或有水火刀毒懸嶮惡象師子虎狼熊羆毒蛇惡蠍蜈蚣蛇蟻蚊虻等怖若能至心憶念彼佛恭敬供養一切怖畏皆得解脫他國侵擾盜賊反亂憶念恭敬彼如來者亦皆解脫 <b>(續いて、同筆ニテ「若他國侵擾盜賊反乱憶念恭敬彼如來者所有怨敵悉皆退散」トアリ)</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
147	D4-14	弘仁時代 不知題経之断簡	大寶積經卷第四十三(菩提流志)	<b>妙法</b> 門皆爲滿足尸羅波羅蜜多故爾時世尊欲重宣此義而説頌曰菩薩處高座諸天所禮敬瞻仰彼尊顏將宣何等法一切皆恭敬具慧除慳恪處歡喜宮殿釋天來請疑天中命盡已來生於人間爲轉輪聖王大力無懼恪若人中命終還復生天上曾未更衆苦奉養法師故恒獲如是等四種廣勝處爲無下劣心恭敬說法者 <b>若以敬愛心奉施於</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
148	D4-15	弘仁時代 不知題経之断簡	大寶積經卷第四十三(菩提流志)	<b>自豐足如</b> 是名爲獲得五種成不壞法四者菩薩摩訶薩處在人中。又復獲得五種希有圓滿之法云何爲五菩薩摩訶薩於舍宅中安設空器隨菩薩手所及之處一切衆寶即皆盈滿是名第一獲得希有圓滿之法菩薩摩訶薩若遇渴時即於其前具八徳池自然涌現是名 <b>第二獲得</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非纖維細胞、墨界
149	D4-16	奈良朝時代 不知題経之断簡	阿毘達磨識身足論卷第十六 (玄奘)	<b>不成就得成就非不善</b> 心者謂阿羅漢起色無色界纏復還退時及修加行入見道時不善心捨不成：就得成就亦學心者謂阿羅漢起欲界纏復還退時非不善心捨不成就得成就亦非學心者除上爾所相若欲界繫有覆無記心捨不成就得成就欲繫界無覆無記心亦爾耶或欲界繫有覆無記心捨不成就得成就 <b>非欲繫界無覆無記心</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
150	D4-17	奈良朝時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三百四十九(玄奘)	<b>須珍財與珍財</b> 須資具與資具隨諸所須悉皆施與復持如是布施善根與諸有情平等共有迴向無上正等菩提不求聲聞獨覺等地善現是爲菩薩摩訶薩安住淨戒波羅蜜多引攝布施波羅蜜多具壽善現復白佛言世尊云何菩薩摩訶薩安住淨戒波羅蜜多引攝安忍波羅蜜多佛言善現若菩薩摩訶薩安住淨戒波羅蜜多設諸有情競來分解菩須珍財與珍財須資具與資具隨諸所須悉皆施與復持如是布施善根與諸有情平等共有迴向無上正等菩提不求聲聞獨覺等地善現是爲菩薩摩訶薩安住淨戒波羅蜜多引攝布施波羅蜜多具壽善現復白佛言世尊云何菩薩摩訶薩安住淨戒波羅蜜多設諸有情競來分解菩薩支節各取持去菩薩於彼不生一念瞋恨之心但作是念我今獲得廣大善利謂諸有情斷我支節 <b>隨意持去</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、非纖維細胞、墨界

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
151	D4-18	奈良朝時代 不知題経之断簡	根本説一切有部毘奈耶卷第五(義淨)	<b>廣説如</b> 上我今宜可現神通力作是念已於淨人坊化作鐵牆周匝圍遶是時賊徒持所盜物欲出其坊但見鐵牆堅無出路心生惶怖棄所盜物於須臾頃不見鐵牆是時賊徒還持盜物。所化鐵牆忽然復現如是至七賊相謂曰汝等知不必有聖者具大威徳護斯物故現此神通 <b>我應棄物急共逃竄時</b>	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
152	D4-19	奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説華手經卷第七(鳩摩羅什)	<b>或當退轉</b> 入小乘法入泥洹者如是猶差此則便爲大壞其心思惟是已語王子曰善哉善哉誠如所言多過少過皆不應近是智者法我所説謬不達汝心王子當知唯有泥洹無諸過咎是故汝當一心勤求止勿往來經歷生死數受衆苦王子當知受胎甚苦處胎時苦出時亦苦 <b>愛別離</b> 苦	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
153	D4-20	奈良朝時代 不知題経之断簡	鞞婆沙論卷第四(僧伽跋澄)	<b>不相應行陰非是種不相應</b> 行陰非是種問曰彼何以故護根不欲令是種答曰尊者曇摩多羅説有爾所痛謂若樂若苦彼不苦不樂痛亦不能苦亦不能樂此云何痛問曰彼佛契經云何通佛説三痛樂痛苦痛不苦不樂痛答曰彼説有樂痛苦痛或軟或增上或鈍或利謂彼樂痛苦痛軟樂痛苦鈍樂痛苦痛止是彼不苦不樂痛但彼離苦樂不欲更有痛以故爾問曰彼何以故 <b>定根不欲令是種</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
154	D4-21	奈良朝時代 不知題経之断簡	五分律卷第二十一(佛陀什、道生)	<b>廣修梵行</b> 我善說法能盡苦源説是語時二十億鬚髮自墮僧伽梨著身鉢孟在手出家不久於尸陀林精進經行足傷血流烏隨啄吞二十億作是念佛弟子中精進無勝我者而今未得盡諸苦源我家幸多財寶亦可反俗快作功德佛知其念從耆闍崛山下來見烏啄吞其血問阿難何故有此血烏競啄之答言二十億於此 <b>經行足傷血出</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
155	D4-22	奈良朝時代 不知題経之断簡	摩訶僧祇律卷第二十八(法顯、佛陀跋陀羅)	<b>若言</b> 大童女乃至不善持戒比丘與我應語莫與此人等相習近若言善持戒者應語取問齊幾許得不白與取半條線半食是名不白與取與他迎食自迎食者若他倩迎食時應白師與某甲比丘迎食師應問彼比丘何故不去答言彼問食苦此間食樂應語若求樂者 <b>莫爲請</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
156	D4-23	● 奈良朝時代 行信願経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四十七(玄奘)	<b>著於色界眼識界及眼觸眼觸爲縁</b> 所生諸受心亦不應取著於耳界心不應取著於聲界耳識界及耳觸耳觸爲縁所生諸受心亦不應取著於地界心不應取著於水火風空(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、非纖維細胞、墨界
157	D4-24	● 奈良朝時代 大般若経之断簡 法隆寺虫喰経	大般若波羅蜜多經卷第三百一十六(玄奘)	<b>波羅蜜多爲趣彼</b> 於是趣不可超越 <b>何</b> 以故布施波羅蜜多尚畢竟不可得況有趣非趣善現一切法皆以淨戒波羅蜜多爲趣彼於是趣不可超越何以故淨戒波羅蜜多尚畢竟不可(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、非纖維細胞、墨界
158	D4-25	奈良朝時代 光明皇后願経之断簡	中阿含經卷第十九(瞿曇僧伽提婆)	<b>餘財主</b> 教已往詣佛所稽首佛足却住一面白曰世尊仙餘財主稽首佛足問訊世尊聖體康強安快無病起居輕便氣力如常(以下、略)	黄蘗染、楮紙、雁皮の混抄カ、非纖維細胞、填料あり、墨界
159	D4-26	奈良朝時代 光明皇后願経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百五十五(玄奘)	<b>是言汝</b> 善男子應修精進波羅蜜多不應觀一切菩薩摩訶薩行若常若無常何以故一切苦是言汝善男子應修精進波羅蜜多不應觀一切菩薩摩訶薩行若常若無常何以故一切苦	黄蘗染、楮紙打紙、雁皮の混抄カ、填料わずか、墨界
160	D4-27	● 奈良時代 光明皇后願経之断簡	楞伽阿跋多羅寶經卷第四(求那跋陀羅)	處方便進學此明白利亦教他人勿隨於他爾時世尊欲重宣此義而説偈言五法三自性及與八種識二種無有我悉攝摩訶衍名相虛妄想自性二種相正智及如如是則爲成相爾 <b>時大慧菩薩復</b>	黄蘗染、麻と雁皮の混抄、打紙、填料わずか、墨界
161	D4-28	● 小聖武 茶毘帝 下絵は後世のものなり	佛説陀羅尼集經卷第九金剛部卷下(阿地瞿多)	<b>一切諸人見者</b> 歡喜若食毒藥當作此印繞身頭上誦呪即差烏樞沙摩摩供養法印呪第五準前身印惟改以二頭指捻中指際上呪曰唵一跋折囉俱嚕駄二摩訶婆去音羅三唵四入鞞五摩訶入鞞六主羅主羅七企羅企羅八娑羅娑羅九訶羅訶羅十駄訶駄訶十一莎訶十二 <b>是法印呪</b>	黄蘗染、マユミと楮の混抄、填料あり、料紙に後世の金銀下絵あり

## 「大日本古写経」リスト


No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
162	D4-29	天平宝字僧光覚願経之断簡	彌沙塞部和醯五分律(佛陀什、道生)	<b>諸比丘乞食</b> 艱難語言莫自苦：困從我取之諸比丘言佛不聽我等從比丘尼受食諸比丘尼言唯親知應與知應取願以白佛諸比丘以是白佛佛以是事集比丘僧告諸比丘今聽諸比丘從親里比丘尼受食從今是波羅提提舍尼法應如是說若比丘從非親里比丘尼受食是比丘應向諸比丘悔過我墮可呵法今向諸大德悔過是名悔過法又有諸病比丘牽 <b>病乞食病</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
163	D4-30	天平勝宝尼信澄願経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第四十二(佛駄跋陀羅)	<b>菩薩真諦正趣離生明足滅</b> 煩惱業成就盡智無生智明足思惟淨慧清淨天眼明足清淨憶念念宿命明足具足淨地清淨諸明除滅諸漏漏盡智明足佛子是爲菩薩摩訶薩十種明足若菩薩摩訶薩安住此法則得一切諸佛一切法中無(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
164	E5-1	徳川時代法華経之断簡		法持價直三千大千世界之宝珠世尊受之龍女忽变成男子得無上菩提住無垢世界演說妙法復達磨大師父爲印土香至國王王聞般若多羅尊者說法信之獻所秘寶珠於尊者	雁皮紙打紙、填料あり、天地欄外金銀箔散、金界
165	E5-2	南北朝時代尊氏願経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第五十(佛駄跋陀羅)	<b>爾時善財童子</b> 漸漸遊行至彼國城周遍推問彼比丘尼時有無量男女大衆答善財言此比丘尼今在王園日(以下、略)	楮紙打紙、填料あり、墨界
166	E5-3	鎌倉時代法華経之断簡	妙法蓮華経卷第三(鳩摩羅什)	<b>此義而說偈言</b> 我此弟子大目犍連捨是身已得見八千二百萬億諸佛世尊爲佛道故供養恭敬於諸佛所常修梵行於無量劫奉持佛法諸佛滅(以下、略)	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界
167	E5-4	鎌倉時代法華経之断簡	妙法蓮華経卷第七(鳩摩羅什)	<b>即現婆羅</b> 門身而爲說法應以比丘比丘尼優婆塞優婆夷身得度者即現比丘比丘尼優婆塞優婆夷身而爲說法應以長者居士宰官婆羅門婦女身得度者即現婦女身而爲說法應以童男童女身得度者即現(以下、略)	紺紙金字、楮紙打紙、填料、銀界
168	E5-5	鎌倉時代大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第二百六十八 吉田寺八幡宮 初分難信解品第三十四之八十七 三藏法師玄奘奉 詔譯	復次善現一切智智清淨故色清淨色清淨故十遍處清淨何以故若一切智智清淨若色清淨若十遍處清淨無二無二分無別無斷故一切智智清淨故受想行識清淨受想 行識清淨故十遍處清淨何以故若一切智智清淨若受想行識清淨若十遍處清淨無二無二分無別無斷故善現一切智智清淨故眼處清淨眼處清淨故十遍處清淨何以故 <b>若一切智智清淨</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
169	E5-6	鎌倉時代大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百五十三 初分校量功德品第三十之五十一 三藏法師玄奘奉 詔譯	復次憍尸迦。若善男子善女人等。爲發無上菩提心者。宣說精進波羅蜜多作如是言。汝善男子應修精進波羅蜜多不應觀鼻界若常若無常不應觀香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲縁所生諸受若常若無常何以故鼻界鼻界自性空香界鼻識界及鼻觸鼻觸爲縁 <b>所生諸受香界乃至</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
170	E5-7	室生寺縁起之断簡		六一山秘密記 最極秘伝ウー山ト者是云々	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨痕
171	E5-8	藤原時代不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百一十七(玄奘)	<b>多生愛著</b> 發起種種惡不善業見此事已作是思惟我當云何濟拔如是多所攝受深生愛著諸有情類令其永離攝受愛著及所發起諸不善業既思惟	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
172	E5-9	藤原時代不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百九十八(玄奘)	<b>無生畢竟</b> 淨故見苦集滅道聖諦無生畢竟淨故見四念住乃至八聖道支無生畢竟淨故見四靜慮四無量四無色定無生畢竟淨故見八解脫九次第定無生畢竟淨故見空無相無願解脫門無	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界


No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
173	E5-10	藤原時代不知題経之断簡	放光般若経卷第十二(無羅叉)	<b>不生亦不有</b> 是法無有迹以五陰迹不可見故至薩云若迹亦不可見爾時諸欲天子諸色天子俱白佛言世尊尊者須菩提諸弟子中佛之眞子	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
174	E5-11	藤原時代不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第三十八(實叉難陀)	無量智力善觀察 最上微妙世難知 普入如來祕密處 利益衆生入九地 總持三昧皆自在 獲大神通入衆刹 力智無畏不共法 願力悲心入九地 住於此地持法藏了善不善及無記 有漏無漏世出世 思不思議悉善知 若法決定不決定 三乘所作悉觀察 有爲無爲行差別 如是而知入世間 <b>若欲知諸衆生心 則能以智如實知</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
175	E5-12	藤原時代不知題経之断簡	佛說寶雨経卷第四(達摩流支)	<b>甚深</b> 難度九者於等不等地方充滿十者息滅一切諸煩惱塵云何菩薩隨順善法譬如大水若行若流若出皆能隨順滋潤草木菩薩如是於諸善法隨順修行隨順流布隨順(以下、略)	楮紙打紙、填料あり、墨界
176	E5-13	藤原時代不知題経之断簡	妙法蓮華経卷第二(鳩摩羅什)	<b>而作是念</b> 我本無心有所希求今此寶藏自然而至世尊大富長者則是如來我等皆似佛子如來常說我等爲子世尊我等以三苦故於生死(以下、略)	紺紙金字、楮紙、填料わずか、銀界
177	E5-14	藤原時代地藏十輪経卷第四	大乘大集地藏十輪経卷第四(玄奘)	大乘大集地藏十輪経卷第四 三藏法師玄奘奉 詔譯 無依行品第三之二 爾時地藏菩薩摩訶薩復白佛言大德世尊画像頗有佛土五濁惡世空無佛時其中衆生煩惱熾盛習諸惡行愚癡佞戾難可化不謂刹帝利旃荼羅宰官旃荼羅居士旃荼羅長者旃荼羅沙門旃荼羅婆羅門旃荼羅如是等人善根微少無有信心諂曲愚癡懷聰明慢不見不畏後 <b>世因果離善知識乃至趣向無間地獄</b>	黄蘗染、雁皮打紙、填料あり、墨界
178	E5-15	梵字			楮紙、填料あり
179	E5-16	鎌倉時代不知題経之断簡	妙法蓮華経卷第四(鳩摩羅什)	<b>度脫苦衆生</b> 尔時舍利弗語龍女言汝謂不久得無上道是事難信所以者何女身垢穢非是法器云何能得無上菩提佛道懸曠經無量劫勤苦積行具修諸度然(以下、略)	紺紙金字、楮紙打紙、銀界 文中の尔は法華経卷第4にはみられない
180	E5-17	鎌倉時代不知題経之断簡	大乘阿毘達磨雜集論卷第九(安慧、玄奘)	<b>一切聲聞</b> 及獨覺等尚不了其名豈能知數况復證入如般若波羅蜜多經中說三摩地其數過百如是於餘大乘經中說三摩地其數無量如於初靜慮所攝定於餘靜慮無色所攝定亦爾如是所說皆依靜慮波羅蜜多清淨者謂初靜慮中邊際定乃至非想非非想處邊際慮中邊際定乃至非想非非想處邊際定是名清淨靜慮無色邊際定者爲欲(以下、略)	紺紙金字、楮紙、銀界
181	E5-18	鎌倉時代不知題経之断簡	雜阿含経卷第二十八(求那跋陀羅)	如是我聞一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園時有比丘名阿梨瑟吒詣佛所稽首佛足退坐一面白佛言世尊所謂甘露者云何名爲甘露佛(以下、略)	紺紙金字、楮紙、銀界
182	E5-19	鎌倉時代不知題経之断簡		次請證戒阿闍梨ノ弟子某申云々	楮紙、填料あり、墨界、朱点、異本校合
183	E5-20	鎌倉時代不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百五(玄奘)	<b>無上正等菩提</b> 饒益有情破魔軍衆爾時佛告天帝釋言如是如是如汝所說憍尸迦若諸有情於諸菩薩摩訶薩衆功德善根深心隨喜迴向無上正等菩提是諸有情速能圓滿諸菩薩行疾證無上正等菩提若諸有情於諸菩薩摩訶薩衆功德善根深心隨喜迴向無上正等菩提是諸有情是大威力常能奉事一切如來應正等覺及善知識恒聞般若波羅蜜多甚深經典善知義趣是諸有情成就如是隨喜迴：向功德善根隨所生處常爲一切世間天人阿素洛等供養恭敬尊重讚歎不見惡色不聞惡聲不嗅惡香不嘗惡味不覺惡觸不思惡法不墮惡趣生天人中恒受種無染勝 <b>樂常不遠</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、朱点

## IV. 紀要 1

## 「大日本古写経」リスト


No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
				<b>從地踊出住世尊前合掌供養</b> 問訊如來時彌勒菩薩摩訶薩知八千恒河沙諸菩薩等心之所念并欲自決所疑合掌向佛以偈問曰	
184	E5-21	藤原時代 不知題経之断簡	妙法蓮華經卷第五 安樂行品第十四(鳩摩羅什)	無量千萬億　大衆諸菩薩 昔所未曾見　願兩足尊説 是從何所來　以何因緣集 巨身大神通　智慧叵思議 其志念堅固　有大忍辱力 衆生所樂見　爲從何所來 ——諸菩薩　所將諸眷屬	楮紙、填料あり
185	E5-22	藤原時代 不知題経之断簡		今貧或朝生暮死故經言出息不待入息入云々	楮紙、填料わずか、墨仮名
186	E5-23	鎌倉時代 不知題経之断簡	阿毘達磨大毘婆沙論卷第九十(玄奘)	<b>答除盡無生智餘無漏慧</b> 此復是何謂現觀邊八無漏忍及學八智無學正見云何無漏智答除無漏忍餘無漏慧此復是何謂學無學八智已説無漏見智自性今當顯示雜不雜相諸無漏見は無漏智耶答應作四句有無漏見非無漏智謂無漏忍此有見相無智相故有無漏智非無漏見謂盡無生智此有智相無見相故有無漏見亦無漏智謂除無漏忍盡無生智餘無漏慧此復是何謂學八智無學正見此 <b>有見相及智相</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
187	E5-24	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百六十(玄奘)	<b>無量百千諸有情類</b> 令發無上正等覺心修菩薩行示現勸導讚勳慶喜令於無上正等菩提乃至得受不退轉記我於彼類深生隨喜何以故舍利子我觀彼人所發弘願心語相稱彼於當來定能安立無量百千諸有情類令發無上正等覺心修菩薩行示現勸導讚勳慶喜令於無上正等菩提乃至得受不退轉記是菩薩乘善男子等亦於過去無量佛所發如是願過去如來應正等覺亦於彼願深生隨喜觀彼心語定相稱故是菩薩乘善男子等信解廣大修廣大行願生他方諸佛國土現有如來應正等覺宣說般若波羅蜜多甚深法處彼聞般若波羅蜜多甚深法已復 <b>能安立</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
188	E5-25	鎌倉時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經搜玄分齊通智方軌卷第二之上 終南山至相寺沙門智儼述	<b>二爲先應三迴故得</b> 等也可准之二此菩薩得如是樂時下迴佛菩薩及衆生此文有四初向佛二迴菩薩三迴衆生四菩薩攝取行等行下明儀式也菩薩文有二可知第三迴衆生文中有三初迴儀式此有二可知二滅惡三生善三菩薩若在家時下辨起心分齊此文有二初釋次如是菩薩今集下結初文有二初在家攝生迴向二菩薩作是念乃至小大下大悲深重初文有四初起心二對緣辨攝有二可知三明成行無間即願智堅固四結第二深重文有二初離苦二得樂可知四復作是念如彼下迴向實際文有三初牒前二迴向二而無 <b>所著下正迴實際三摩訶薩下結同佛迴正迴實際有二</b>	楮紙打紙、填料わずか、墨界
189	E5-26	鎌倉時代 不知題経之断簡	阿毘達磨大毘婆沙論卷第九十七(玄奘)	<b>答邪智攝邪見非邪見攝邪智不攝</b> 何等謂五識相應染汚慧及除五見餘意識相應染汚慧有審決相無推度相故諸成就邪見彼邪智耶答諸成就邪見亦邪智邪智多故見亦智故即道類智未已生位有成就邪智非邪見謂學見迹即道類智已生諸有學位名學見迹 <b>已具見四聖諦迹故</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料、纖維に方向性あり
190	E5-27	鎌倉時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第十一(佛駄跋陀羅)	<b>無性爲性一切</b> 諸法無爲爲性一切佛刹無相爲相究竟三世皆悉無性言語道斷於一切法而無所依菩薩解如是等諸甚深法解一切世間悉皆寂滅解一切諸佛甚深妙法解佛法世間法等無差別世間法入佛法佛法入世間法佛法世間法而不雜亂世間法不壞佛法真實法界不可破壞安住三世平等正法亦不捨菩提心不捨教化衆生心增長大慈大悲心悉欲救度一切衆生菩薩作是念我不成就衆生誰當成就我不調伏衆生誰當調伏我不寂靜衆生誰當寂靜我不令衆生歡喜誰當令歡喜 <b>我不清淨</b>	楮紙打紙、填料あり、墨界、朱点、墨点

No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
191	E5-28	鎌倉時代 不知題経之断簡	大乘起信論(眞諦)	<b>以言説引導衆</b> 生其旨趣者皆爲離念歸於眞如以念一切法令心生滅不入實智故分別發趣道相者謂一切諸佛所證之道一（以下、略)	楮紙打紙、填料あり、朱仮名・読点
192	E5-29	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百一十(玄奘)	<b>方便</b> 無生爲方便無所得爲方便迴向一切智智修習八解脫八勝處九次第定十遍處以四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支無二爲方便無生爲方便無所得爲方便迴向一切智智修習八解脫八勝處九次第定十遍處慶喜當知以四念住無二爲方便無生爲方便無所得爲(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
193	E5-30	鎌倉時代 不知題経之断簡	善見律毘婆沙卷第十五(僧伽跋陀羅)	<b>有智男子</b> 是名餘語或時默然不答若知是非法作餘語答僧得波夜提若狐疑是法非法作餘語答僧得波夜提若實知答僧言我不知道波夜提畏戾鬪僧默然不犯餘文句易可解不須廣説此是性罪從身心口業起不隨問答廣説竟若譏嫌被僧差人波夜提若譏嫌餘人突吉羅此是性罪身口業起譏嫌戒竟若 <b>露地敷僧臥具戒</b>	楮紙打紙、填料多い、非纖維細胞、墨界
194	F6-1	伝藤原道長筆 大般若経之断簡	妙法蓮華經卷第三(鳩摩羅什)	<b>説偈言</b> 大聖轉法輪顯示聖轉法輪顯示諸法相度苦惱衆生令得大歡喜衆生聞此法得道若生天諸惡道減少忍善者增益爾時大通智勝如來默然許之又諸比丘南方五百萬億國土諸大梵王各自見宮殿光明照耀昔所未有歡喜踊躍(以下、略)	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界
195	F6-2	弘仁時代 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百五十一(玄奘)	<b>彼我無彼我無我亦</b> 不可得所以者何此中尚無一切智等可得何況有彼我與無我汝若能修如是靜慮是修靜慮波羅蜜多復作是言汝善男子應修靜慮波羅蜜多不應觀一切智若淨若不淨不應觀道相智一切相智若淨若不淨何以故一切智一切智自性空道相智一切相智道相智一切相智自性空是一切智自性即非自性是道相智一切相智自性亦非自性若非自性即是靜慮波羅蜜多於此靜慮波羅蜜多一切智不可得彼淨不淨亦不可得道相智一切相智皆不可得彼淨不淨亦不可得所以者何此中尚無一切智等可得何況有彼淨與不淨汝若能修如是靜慮是修靜慮波羅蜜多憍尸迦是善男子善女人等作此等説是爲宣説真正靜慮波羅蜜多 大般若波羅蜜多經卷第一百五十一	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
196	F6-3	奈良朝時代 不知題経之断簡 淡紅紙僧淳祐寫	妙法蓮華經玄贊卷第二(窺基)	<b>此經亦名妙法蓮華</b> 二名何別答有五解一云蓮華有二時得名如蓮華未出水時性能出水故名蓮華彼經亦爾説彼智慧之性能出於水性能開敷時猶未化二乘趣一乘故今者此經正化彼入大乘之位超出二乘如蓮華出水已亦名蓮華彼經正名無量義傍名妙法蓮華正迺菩薩傍令聲聞聞之信解不愚於法後方化入此經正名妙法蓮華亦得傍名無量義正化聲聞入一乘故時位有殊體性無二故將説此經先入無量義處三昧二云無量義經名法華與此名體無二彼時唯教菩薩未有二乘趣一乘故説教理所依眞如妙理正名無量義傍名妙法蓮華此時化彼二乘趣一乘故説能依行果正名妙法蓮華如出水故傍亦得名無量義也三云彼據智慧體名法華此約智慧功能名法華會二歸一故四云又彼以教理名爲蓮華菩薩已修一乘之因趣一乘果故不爲説行果一乘名爲法華由但不知應病與藥之教理故但説教理名爲法華今此會中二乘未能應病與藥故不爲説教理蓮華但爲彼説行果二種名爲蓮華令趣入故故下經云乘此寶 <b>乘直至道場</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
197	F6-4	● 奈良朝時代 不知題経之断簡	佛説興起行經卷上(康孟詳)	<b>腰以上</b> 出煙或左脇出煙右脇出火或左脇出火右脇出煙或腹前出煙背上出火或腹前出火背上出煙或腰以下出火腰以上出水或腰以下出水腰以上出火或左脇出右脇出水或左脇出水右脇出火或腹前出水背上出火或腹前出火背上出水或左肩出水右肩出火(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
198	F6-5	● 奈良朝時代 行信願経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百五十二(玄奘)	<b>菩提修</b> 諸菩薩摩訶薩行證得無上正等菩提善現諸菩薩摩訶薩要不思惟內空亦不思惟外空内外空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界



## 「大日本古写経」リスト

※●は本文中で取り上げたもの

No	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
199	F6-6	奈良朝時代 不知題経之断簡	衆事分阿毘曇論卷第十二(求那跋陀羅、菩提耶舍)	<b>亦如是亦如是</b> は法界或應修或不應修云何應修謂善有爲法界云何不應修謂不善無記法界及數滅八不穢汚十分別色界或穢汚或不穢汚云何穢汚謂不善色界及隱沒無記色界云何不穢汚謂善色界及不隱沒無記色界如色界聲界眼識耳識鼻識舌識身識界意界意識界法界亦如是十七是果及有果一分別法界如法入九不受九分別眼界或受或不受云何受若自性受云何不受若非自性受如眼界色界耳界鼻界香界舌界味界身界觸界亦如是十八界或四大造或非四大造云何四(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、 填料わずか、墨界
200	F6-7	奈良朝時代 光明皇后願経之断簡	大寶積經卷第一百一十八(竺法護)	<b>清淨法身證</b> 法身者即是一乘無異如來無異法身言如來者即是法身證究竟法身者即究竟一乘究竟一乘者即離相續何以故世尊如來住時無有限量等於後際如來能以無限大悲無限誓願利益世間作是說者是名善說若復說言如來是常是無盡法一切世間究竟依者亦名善說是故能於無護世間無依世間與等後際作無盡歸依常住歸依究竟歸依者謂如來應正等覺法者是一乘道僧者是三乘衆此二歸依非究竟依名少分依何以故說一乘道證究竟法身於後更無說一乘道三乘衆者有恐怖故歸依如來求出修學有所作故向阿耨多羅三藐三菩提故二依非究竟依是有限依若諸有情如來調伏歸依如來得法津潤由信樂心歸依於法及比丘僧是二歸依由法津潤信入歸依如來者非法津潤信入歸依言如來者是真實依此二歸依以真實義即名究竟歸依如來何以故如來不異此二歸依是故如來即三歸依何以故說一乘道如來最勝具四無畏正師子吼若諸如來隨彼所欲而以方便說於二乘即是大乘以第一義無有二乘二乘者同入一乘一乘者即勝義乘世尊聲聞獨覺初證聖諦非以一智斷諸住地亦非一智證四遍知諸功德等亦非以法能善了知此 <b>四法義世尊</b>	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界
201	F6-8	● 藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百四十五(玄奘)	<b>爲與世間作所</b> 趣故發趣無上正等菩提善現諸菩薩摩訶薩希求無上正等菩提修諸菩薩摩訶薩行欲以四攝事攝一切有情所謂布施愛語利行同事欲爲有(以下、略)	黄蘗染、楮紙、填料多い、墨界、朱区切点、長治3年(1106)2月11日願主龍門寺上座頼因書写奥書
202	F6-9	● 藤原道長筆 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第一百一十(玄奘)	<b>大捨十八佛</b> 不共法慶喜當知以五眼無二爲方便無生爲方便無所得爲方便迴向一切智智修習無忘失法恒住捨性以六神通無二爲方便無生爲方便無所得爲方便迴向一切智智修習無忘失法恒住捨性慶喜當知以五(以下、略)	黄蘗染、楮紙、填料多い、墨界、朱区切点、延文3年(1358)8月17日五師重懷書写校合奥書
203	F6-10	● 藤原道長筆 大般若経之断簡	大般若經波羅蜜多經卷第三百三十一(玄奘)	<b>法性不虛妄</b> 性不變異性平等性離生性法定住實際虛空界不思議界今時應學不應作證我於苦聖諦今時應學不應作證我於集滅道聖諦今時應學不應作證我於四靜慮今時應學不應作證我於四無量四無色定今時應學不應作證我於八解脫今時應(以下、略)	黄蘗染、楮紙、填料あり、非纖維細胞、墨界 承安2年(1172)6月3日錦部光時書写校合奥書

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

## IV. 紀要 1

### 「大日本古写経」リスト


No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
207	F6-14	● 伝藤原道長筆 大般若経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第六十四(玄奘)	<p>於眼耳處無所有不可得眼耳鼻處於舌處無所有不可得舌處性空故舌處於舌處無所有不可得舌處於眼耳鼻處無所有不可得眼耳鼻舌處於身處無所有不可得身處性空故身處於身處:無所有不可得身處於眼耳鼻舌處無所有不可得眼耳鼻舌身處於意處無所有不可:得意處性空故意處於意處無所有不可得意處於眼耳鼻舌身處無所有不可得舍利子我於如是諸法以一切種一切處一切時求菩薩摩訶薩亦無所有不可得何以故自性空故舍利子色處性空故色處於色處無所有:不可得色處於聲處無所有不可得聲處性空故聲處於聲處無所有不可得聲處於色處無所有不可得色聲處於香處無所有不可得香處性空故香處於香處無所有不可得香處於色聲處無所有不可得色聲香處於味處無所有不可得味處性空故味處:於味處無所有不可得味處於色聲香處無所有不可得色聲香味處於觸處無所有不可得觸處性空故觸處於觸處無所有不可得觸處於色聲香味處無所有不可得色聲香味觸處於法處無所有不可得法處性空故法處於法處無所有不可得法處於色聲香味觸處無所有不可得舍利子我於如是諸法以一切種一切處一切時求菩薩摩訶薩亦無所有不可得何以故自性空故大般若波羅蜜多經卷第六十四</p>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界、延久元(1069) 西三月十日書写奥書

208	G7-1	藤原時代 不知題経之断簡	註無量義經十功德品第三(最澄)	<p><b>好殺戮者起大悲</b>心生嫉妬者起隨喜心有愛著者起能捨心諸慳貪者起布施心多憍慢者起持戒心嗔恚盛者起忍辱心生懈怠者起精進心諸散亂心起禪定心多愚痴者起智慧心未能度彼者起度彼心行十惡者起十善心樂有爲者志無爲心有退心者作不退心爲有漏者起無漏心多煩惱者起除滅心善男子是名是經第一功德不思議力(この間、経文 142 字を欠く)</p> <p>善男子第二是經不可思議功德力者若有衆生是聞是經者若一轉若一偈乃至一句則能通達百千億義無量數劫不能演說所受持法所以者何以其是法義無量故善男子是經譬如從一種子生百千萬百千萬中一一復生百千萬數如是展轉乃至無量是經典者亦復如是從於一法生百千義百千義中一一復生百千萬數如是展轉乃至無量無邊之義是故此經名無量義善男子是名是經第二功德不思議力(この間、経文 133 字を欠く)</p> <p>善男子第三是經不可思議功德力者若有衆生得聞是經(以下、略)</p>	紺紙金字、全体が藍で覆われ、繊維の形状などは不明
-----	------	-----------------	-----------------	---	--------------------------

209	G7-2	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第四百三(玄奘)	<p><b>波羅蜜多</b>是處有情不爲一切人非人等之所惱害唯除決定惡業應受此中有情漸次修學三乘正行隨其所願乃至速證三乘涅槃世尊如是般若波羅蜜多於此三千大千世界作大饒益世尊如是般若波羅蜜多具大神力隨所在處則爲有佛作諸佛事所謂利樂一切有情世尊譬如無價大寶神珠具無量種勝妙威德隨所住處有此神珠人及非人無諸惱害設有男子或復女人爲鬼所執身心苦惱若有持此神珠示之由珠威力鬼便捨去諸有熱病或風或淡或熱風淡合集爲病若有繫此神珠著身如是諸病無不除愈此珠在暗能作照明熱時能涼寒時能暖隨地方所有此神珠時節調和不寒不熱若地方處有此神珠蛇蝎等毒無敢停止設有男子或復女人(以下、略)</p>	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界、紫色の繊維の混入あり
-----	------	-----------------	-------------------	--	----------------------------


No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
210	G7-3	伝藤原道長筆 不知題経之断簡	金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經卷上(金剛智)	<p><b>但觀字因起等同於大空</b>堅住金剛性全成金剛體速轉自身分便同堅固身如秋八月霧微細清淨光常住此等持是名微細定自性所生障 無得此方便決定同金剛三界無能越 時自性障聞此語已忽然不現一切如來大勝金剛頂最勝真實大三昧耶品第八爾時遍照薄伽梵復現種種光明於頂上放金剛威怒光明照諸菩薩金剛手等皆各默然復現身手具十二臂持智拳印復持五山峯金剛蓮華摩尼羯磨鉤索鎖鈴智劍法輪十二大印身住千葉大白蓮花身色如日五髻光明其光無主遍於十方面門微笑即說大勝金剛頂最勝真實大三昧耶眞言曰</p> <p>唵*摩*訶引 嚩日*囉*二 合 瑟 拏*二 合 灑 : hUMtrahhrihahhum</p> <p>吽 怛 *二合 紇理二合 嚧 吽 *引</p> <p>說此明已復說頌曰十方淨妙國三世及三界最尊獨無比此大轉輪王能摧諸佛頂 能攝諸等覺親近爲眷屬速成大悲地若末法世人長誦此眞言刀兵不能害水火不焚漂蓮華金剛手翼從而侍衛若誦一百八能滅百劫罪若誦一千遍能成滿意願若誦一洛又得大金剛身若誦一俱胝 得成遍照尊千佛來共護決定無有疑我今更說印金剛最勝心內堅十度縛忍願屈如頂是名根本心最勝轉輪印(以下、略)</p>	黄蘗染、楮紙打紙、填料なし、裏の梵字の墨がみえる、金界、朱点、朱仮名、墨仮名
211	G7-4	法華経之断簡埋経もの	妙法蓮華経卷第三(鳩摩羅什)	<p>五百萬億諸佛世界六種震動其國中閻幽冥之處日月威光所不能照而皆大明其中衆生各得相見咸作是言此中云何忽生衆生又其</p>	楮紙、填料あり、繊維に隙間が多く、経筒の緑青が付着
212	G7-5	藤原時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第五百六十五(玄奘)	<p><b>如苑伽沙數大劫修行布施所獲功德</b>何況能於一日半日是諸菩薩不久當住不退轉地常爲如來應正等覺共所護念諸菩薩衆若爲諸佛所護念者定證無上正等菩提不墮聲聞獨覺等地於諸惡趣決定不生常生天人不離諸佛若諸菩薩修行引發甚深般若波羅蜜多憶念思惟諸佛功德經彈指頃尚獲無邊功德勝利況經一日若過一日勇猛精進修行引發甚深般若波羅蜜多憶念思惟諸佛功德如香象等諸菩薩衆不動佛所常修梵行不離般若波羅蜜多時薄伽梵說是經已無量菩薩摩訶薩衆慈氏菩薩而爲上首具壽善現舍利子等諸大聲聞并諸天龍健達縛等一切大衆聞佛所說皆大歡喜信奉奉行大般若波羅蜜多經卷第五百六十五</p>	黄蘗染、楮紙、填料多い、繊維の方向性あり、源有長校合奥書あり
213	G7-6	藤原時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴経卷第三十九(佛駄跋陀羅)	<p><b>不令衆生有恐怖</b>心神力自在一切世界水火風災壞時悉能住持一切衆生資生之具神力自在以不可思議世界置於掌中遠擲他方過不可說世界不令衆生有恐怖心神力自在令一切衆生解一切佛刹猶如虛空神力自在佛子是爲菩薩摩訶薩十種神力自在佛子菩薩摩訶薩有十種力自在何等爲十所謂衆生力自在不捨衆生教化調伏故佛刹力自在以不可說莊嚴具莊嚴顯現諸佛刹故法力自在令一切身入無身故劫力自在不斷一切菩薩行故佛力自在覺悟生死長寢衆生故行力自在攝取一切菩薩行故如來力自在度脫一切衆生故無師智力自在自然覺悟一切法故一切智力自在一切智人智覺悟故大悲力自在不捨一切衆生故佛子是爲菩薩摩訶薩十種力自在佛子是爲菩薩摩訶薩衆生自在等十種自在若菩薩摩訶薩成就此十種自在者欲成無上菩提不成無上菩提自在隨意雖成菩提而亦不斷菩薩諸行何以故菩薩摩訶薩出生諸大願故善巧方便示現無量自在法門(以下、略)</p>	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界。一交了とあるが、卷第三十九を途中で終わり、尾題のみ卷第四十としている。



## IV. 紀要 1

## 「大日本古写経」リスト

※●は本文中で取り上げたもの

No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
220	G7-13	鎌倉時代 金光明経之断簡	金光明最勝王經卷第一(義淨)	<b>煩惱之所纏迫</b> 我今開悟令其解脱然由往昔慈善根力於彼有情隨其根性意樂勝解不起分別任運濟度示教利喜盡未來際無有窮盡是如來行三者佛無是念我今演說十二分教利益有情然由往昔慈善根力爲彼有情廣説乃至盡未來際無(以下、略)	紺紙金字、楮紙、填料、無界
221	G7-14	徳川時代 普門品之断簡	妙法蓮華經卷第七(鳩摩羅什)	<b>菩薩以偈問曰</b> 世尊妙相具我今重問彼佛子何因緣名爲觀世音具足妙相尊偈答無善應諸方所弘誓深如海歷劫不思議待多千億佛發大清淨願我爲汝略説聞名及見身心念不空過能滅諸有苦假使興害意推落大火坑念彼觀音力(以下、略)	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界
222	H8-1	● 奈良朝時代 稱讃浄土佛攝受経之断簡	稱讃浄土佛攝受経(玄奘)	<b>不可思議</b> 又舍利子於此雜染堪忍世界五濁惡時若有淨信諸善男子或善女人聞説如是一切世間極難信法能生信解受持演説如教修行當知是甚爲希有無量佛所曾種善根是人命終定生西方極樂世界受用種種功德莊嚴清淨佛土大乘法樂日夜六時親近供養無量壽佛遊歷十方供養諸佛於諸佛所聞法受記福慧資糧疾得圓滿速證無上正等菩提時薄伽梵説是經已尊者舍利子等諸大聲聞及諸菩薩摩訶薩衆無量天人阿素洛等一切大衆聞佛所説皆大歡喜信受奉行稱讃浄土佛攝受經	黄蘗染、楮紙打紙、填料あり、墨界
223	H8-2	奈良朝時代 不知題経之断簡	大寶積経卷第二十八(菩提流志)	<b>以減色故證</b> 於法界以如實智於法界中所有諸法如實覺知諸法(以下、略)	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
224	H8-3	奈良朝時代 不知題経之断簡	根本薩婆多部律攝卷第十一(義淨譯)	<b>若大衆多於日時候難可知者佛言</b> 食時欲至先鳴健稚長打一通更打三搥總名三下衆既聞已各淨洗浴及諸大衆共浴尊像有病苾芻即應請食授事苾芻亦聽先嗽次打三通更打三下總名長打大衆方食若聲小不聞應打大鼓或吹雙凡讀經浴像及洗浴時皆打三下打健稚法復有五種若常集衆者長打三通大打三下若寺家營作長打三通大打兩下若苾芻死長打一通漸細便絶若坐禪處應搖錫杖警覺時衆若遭賊時欲令人覺任打多少大衆集會行食 <b>難者隨處分坐</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
225	H8-4	奈良朝時代 不知題経之断簡	五分律卷第十二彌沙塞(佛陀什、竺道生)	強捉剃皆不犯爾時諸比丘尼與比丘獨屏處共立共語生染著心遂心遂(以下、略)	黄蘗染、楮紙打紙、填料わずか、墨界
226	H8-5	奈良朝時代 不知題経之断簡	大方廣佛華嚴經卷第三十八(佛駄跋陀羅)	<b>一切煩惱</b> 不能染故無色界天受生宮殿除滅衆生障難處故降生不淨世界宮殿欲令衆生斷一切煩惱故現處深宮采女妻子色味宮殿教化成熟本同行衆生故現爲四天下王四大天王帝釋梵王宮殿爲調伏自在心衆生故一切菩薩神力自在命行宮殿一切諸禪解脱三昧智慧自在故於諸佛所受無上自在一切智王記宮殿十力莊嚴行一切法自在法王事故佛子是爲菩薩摩訶薩十種宮殿若菩薩摩訶薩安住此法則得一切法王受記自在法佛子菩薩摩訶薩有十種(以下、略)	黄蘗染、楮紙、填料わずか、墨界
227	H8-6	● 奈良朝時代 光明皇后願経之標紙	根本説一切有部毘奈耶雜事卷第十九(義淨)	根本説一切有部毘奈耶雜事卷第十九	黄蘗染、楮紙、填料あり、巻緒は痕跡のみ。

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの

※●は本文中で取り上げたもの



## 「大日本古写経」リスト

『大日本古写経』リスト

『大日本古写経』リスト

No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
242	H8-21	鎌倉時代 不知題経之断簡 世に一休和尚筆と云ふ	大方等大集経卷第二十四 (曇無讖)	<b>妄如嬰兒狂如鬼著</b> 衆生具足如是惡事我當云何不生憐愍爾時復爲死所侵逼失於智慧壽命諸有捨棄諸陰身壞命壞四大離散三世衆生壽命之怨一切衆生成就死法我當云何不生憐愍爾時復有所不愛物而來親近所謂寒熱飢渴惡人惡獸衆生如是我當云何不生憐愍復有所愛別離所謂盛年財寶康強壽命父母妻子親戚眷屬上妙六塵衆生既受如是等苦我當云何不生憐愍或有衆生於三世中求上六塵而不能得以是因緣具受衆苦若我於此惡類衆生不生憐愍我當云何得阿耨多羅三藐三菩提一切衆生受五陰擔我亦如是若不修大悲之心云何得捨如是重擔一切聖人已得遠離五陰重擔若不修行三種淨戒不善思惟其心放逸不行正道不得解脫如是之人受百種苦衆生既受如是百苦我當云何不修悲若有衆生於一日夜能如是觀是人得心猶如虛空是人能於一切衆生修集大悲是人能得身心寂靜是人不遠正眞法界及以法性如是方便能得聲聞緣覺衆生緣悲若有菩薩初修道時作是思惟設令我有恒河沙等如須彌身當以是 <b>身爲於一人</b>	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界

243	H8-22	鎌倉時代 不知題経之断簡	大方等大集経卷第二十二 (曇無讖)	<b>不名法行僑陳如</b> 若有比丘能觀身心心不貪著外一切相謙虛下意不生憍慢不以愛水灌溉業田亦不於中種識種子滅覺觀心境界都息永離煩惱其心寂靜如是比丘我則說之名爲法行如是比丘若欲獲得聲聞菩提緣覺菩提如來菩提即能得之僑陳如工陶師埏埴調泥置之輪上隨意成器法行比丘亦復如是僑陳如若有比丘修法行者當觀三事一者身二者受三者心觀三事已得二種智一者盡智二者無生智僑陳如云何盡智云何無生智知盡煩惱名爲盡智知盡有支名無生智復次無行行智名曰盡智無行果智名無生智盡諸使智名曰盡智盡煩惱智名無生智復次知盡諸行名曰盡智盡一切有名無生智分別盡物是名盡智知諸縛解名無生智知盡根界名曰盡智知盡緣界名無生智不覺觀煩惱名曰盡智不覺觀果報名無生智復次盡三地智名曰盡智盡一切漏名無生智復次我生已盡梵行清淨名曰盡智更無餘有名無生智如是二智即名一智亦名一行知於三道若有比丘能斷三道是名法行能作是觀是觀心受云何比丘能觀察身若有比丘觀息出入是名觀身觀受觀心云何名爲觀息出入息入出者名阿那波那入名阿那出名 <b>波那觀於出入如門如向</b>	紺紙金字、楮紙、填料あり、銀界
-----	-------	-----------------	----------------------	---	-----------------

244	H8-23	鎌倉時代 不知題経之断簡	根本説一切有部毘奈耶雜事卷第二十二 (義淨)	<b>抱付夫人云是汝子抱付夫人云是汝子</b> 夫人得已即呪願曰願兒長壽今此孩子與作何名王曰有福孩兒被牛所護應名牛護又安樂夫人親爲撫養母亦改號名牛護母夫人得已即呪願曰願兒長壽今此孩子與作何名王曰有福孩兒被牛所護應名牛護又安樂夫人親爲撫養母亦改號名牛護母于時北方得叉尸羅國王名圓勝所治國化安隱豐樂人民熾盛廣説如餘於諸園樹常有花果膏雨順時乞食易得後於異時王與諸臣在高樓上歡娛恣意告諸臣曰頗有餘國如我境中豐樂安隱得相似不大臣白言有嚙逝尼國王名猛光彼亦豐樂安隱花果不絶與此不殊彼有商人來至於此王遣喚來既至具問聞其富盛王生嫉心報諸臣曰君等嚴兵我欲伐彼其王即自親整四兵向嚙逝尼國漸至彼城侵掠無度殘暴非理人不聊生猛光大王既聞賊至亦嚴四兵出相拒戰猛光不如兵衆分離遂騎單馬逃向餘處至荒野外見一耕人名曰增長躬自犁作王觀容色有異餘人即問言汝是勇健壯兒頗會 <b>聞道有圓勝王</b>	紺紙金字、楮紙、填料あり、纖維の方向性なし、銀界
-----	-------	-----------------	---------------------------	--	--------------------------

245	H8-24	鎌倉時代 不知題経之断簡		眞言曰(計14行)	黄蘗染、楮紙、填料あり、墨界、朱点、墨仮名
-----	-------	-----------------	--	-----------	-----------------------

『大日本古写経』リスト

『大日本古写経』リスト

『大日本古写経』リスト

No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
246	H8-25	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般若波羅蜜多經卷第三百六十二 (玄奘)	大般若波羅蜜多經卷第三百六十二 初分多問不二品第六十一之十二 三藏法師玄奘奉詔譯 佛言善現菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時雖於諸法常樂決擇而不得色亦不得受想行識不得眼處亦不得耳鼻舌身意處不得色處亦不得聲香味觸法處不得眼界亦不得耳鼻舌身意界不得色界亦不得聲香味觸法界不得眼識界亦不得耳鼻舌身意識界不得眼觸亦不得耳鼻舌身意觸不得眼觸爲緣所生諸受亦不得耳鼻舌身意觸爲緣所生諸受不得地界亦不得水火風空識界不得無明亦不得行識名色六處觸受愛取有生老死愁歎苦憂惱不得布施波羅蜜多亦不得淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多不得內空亦不得外空內外空空大空勝義空有爲空無爲空畢竟空無際空散空無變異空本性空自相空共相空一切法空不可得空無性空自性空無性自性空不得眞如亦不得法界法性不虛妄性不變異性平等性離生性法定法住實際虛空界不思議界不得四念住亦不得四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支不得苦聖諦亦不得集滅道聖諦不得四靜慮亦不得四無量四無色定不得空解脫門亦不得無相 <b>無願解脫門不得</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料多い、墨界

247	H8-26	鎌倉時代 不知題経之断簡	大般涅槃経卷第四 (曇無讖)	<b>諸技藝畫師</b> 泥作造書教學種植根栽蠱道呪幻和合諸藥作倡伎樂香花治身擣蒲團碁學諸工巧若有比丘能離如是諸惡事者當說是人眞我弟子爾時迦葉復白佛言世尊諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷因他而活若乞食時得雜肉食云何得食應清淨法佛言迦葉當以水洗令與肉別然後乃食若其食器爲肉所汚但使無味聽用無罪若見食中多有肉者則不應受一切現肉悉不應食食者得罪我今唱是斷肉之制若廣說者則不可盡涅槃時到是故略說是則名爲能隨問答迦葉云何善解因緣義如有四部之衆來問我言世尊如是之義如來初出何故不爲波斯匿王說是法門深妙之義或時説深或時説淺或名爲犯或不犯云何名墮云何名律云何名波羅提木叉義佛言波羅提木叉者名爲知足成就威儀無所受畜亦名淨命墮者名四惡趣又復墮者墮於地獄乃至阿鼻論其遲速過於暴雨聞驚怖堅持禁戒不犯威儀修習知足不受一切不淨之物又復墮者(以下、現狀卷頭「長養地獄畜長養地獄畜生餓鬼以是諸義故名曰墮波羅提木叉者離身口意不善邪業律者入戒」 <b>威儀深經善義</b>	黄蘗染、楮紙打紙、填料(2μm)多い、墨界。卷頭の二行分の料紙は、巻末の本文に続く内容で、紙背に宝塔印を捺している
-----	-------	-----------------	-------------------	--	---

248	H8-27	鎌倉時代 法華経之断簡	妙法蓮華経信解品第四	妙法蓮華経信解品第四 爾時慧命須菩提摩訶迦旃延摩訶迦葉摩訶目犍連從佛所聞未曾有法世尊授舍利弗阿耨多羅三藐三菩提記發希有心歡喜踊躍即從座起整衣服偏袒右肩右膝著地一心合掌曲躬恭敬瞻仰尊顏而白佛言我等居偈之首年竝朽邁自謂已得涅槃無所堪任不復進求阿耨多羅三藐三菩提世尊往昔說法既久我時在座身體疲倦但念空無相無作於菩薩法遊戲神通淨佛國土成就衆生心不喜樂所以者何世尊令我等出於三界得涅槃證又今我等年已朽邁於佛教化菩薩阿耨多羅三藐三菩提不生一念好樂之心我等今於佛前聞授聲聞阿耨多羅三藐三菩提記心甚歡喜得未曾有不謂於今忽然得聞希有之法深自慶幸獲大善利無量珍寶不求自得世尊我等今者樂說譬喻以明斯義譬若有入年既幼 <b>稚捨父逃逝久住</b>	紺紙金字、楮紙、纖維の形状などは藍に埋もれて確認できない、銀界
-----	-------	----------------	------------	--	---------------------------------

#### IV. 紀要 ①

### 「大日本古写経」リスト

No.	箱・登録番号	時代・名称	名称・訳者	本文	料紙データ
249	H8-28	南北朝時代 尊氏経之断簡	中阿含経巻第五 十一 (僧伽提婆)	<p>有靖因此必斷我等寧可善共將護於此賢者是故諸比丘善共將護猶如親屬護一眼人於是尊者跋陀和利即從坐起偏袒著衣叉手向佛白曰世尊何因何縁昔日少施設戒多有比丘遵奉持者何因何縁世尊今日多施設戒少有比丘遵奉持者世尊答曰跋陀和利若比丘衆不得利者衆便無憲好法若衆得利者衆便生憲好法生喜好法已世尊欲斷此憲好法故便爲弟子施設於戒如是稱譽廣大上尊王所識知大有福多學問跋陀和利若衆不多聞者衆便不生憲好法若衆多聞者衆便生憲好法衆生憲好法已世尊欲斷此憲好法故便爲弟子施設戒跋陀和利不以斷現世漏故爲弟子施設戒我以斷後世漏故爲弟子施設戒跋陀和利是故我爲弟子斷漏故施設戒至受我教跋陀和利我於昔時爲諸比丘說清淨馬喩法此中何所因汝憶不耶尊者跋陀和利白曰世尊此中有所因所以者何世尊爲諸比丘施設一坐食戒諸比丘衆皆奉學戒及世尊境界諸微妙法唯我說不堪任從坐起去以不學具戒及世尊境界諸微妙法故世尊是謂此中有所因世尊復告曰跋陀和利</p>	楮紙、埴料 (2μm) あり、墨界
250	H8-29	南北朝時代 大集経巻第十五 断簡	大方等大集経巻 第十七 (曇無讖)	<p>無諸煩惱現入煩惱是其莊嚴觀於生死而不證實際到空無相無作門而能教化行諸見諸相諸願衆生是其莊嚴現入聲聞辟支佛涅槃而不捨生死是其莊嚴現諸趣受生而不動於法性現說一切言教而不動於無言是其莊嚴能現一切佛事而不捨菩薩行是其莊嚴善男子是爲菩薩大誓莊嚴大乘莊嚴道莊嚴菩薩以大誓莊嚴自莊嚴故能乘大乘順出世間聖道未得薩婆若爲衆生故能作佛事</p> <p>大方等大集経巻第十五</p> <p>貞治七年正月十六日 尊秀</p>	楮紙、埴料 (2μm) あり、墨界。 尾題に大方等大集 経巻第十五とある が、経文は巻第十 七の末尾のもの